ジャブローのモグラども

シムＣＭ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙世紀００７９

機動戦士ガンダムの世界に転生したガンダムオタクのコウイチ＝カルナギは、大好きなモビルスーツに乗るために地球連邦軍に入るため、努力した。

しかし、先天的な病気によりその道を挫折。

望みが立たれジャブローで窓際をしていたカルナギ大尉の元に、かつての上司が声をかけたのだ。

コーウェン准将「君に連邦軍モビルスーツの開発を任せたい」

それはお前の仕事だろ。

これは、戦わない連邦士官が、ただ延々とジャブローの地下でモビルスーツ開発計画に四苦八苦する物語である。

ガンダムはアムロ＝レイが乗る前に無事完成するのか!?

目次

00 転生者 ―― 1
01 一年戦争背景 ―― 6
02 連邦軍モビルスーツ開発計画 ―― 10
03 派閥 ―― 13
04 ジャミトフ＝ハイマン ―― 16
05 V作戦始動 ―― 22
06 パワハラ ―― 25
07 英国紳士の無理難題 ―― 29
08 モビルスーツモドキ ―― 34
09 つかの間 ―― 40
10 会議室 ―― 44
11 MS―07『グフ』 ―― 48
12 目的は達成させるもの ―― 51
13 ガンダム量産計画の夢 ―― 56
14 槍玉にビームライフル ―― 61
15 RX―77開発計画 ―― 65
16 量産機の元となるもの ―― 72
17 死すべき運命の人達 ―― 76
18 事後承諾 ―― 81
19 V作戦の完成 ―― 89
20 ホワイトベース宇宙へ ―― 93
21 昇進と進退 ―― 98
22 V作戦のその先に ―― 103
23 ガンダム大地に立った後で～その

1 ―――― 107
24 ガンダム大地に立った後で～その2 ―――― 112
25 ルナ2準備 ―――― 117
26 ニュータイプの価値 ―――― 121
27 舞台裏の目 ―――― 126
28 敗北 ―――― 131
29 殺意 ―――― 138
30 ジムの系譜 ―――― 144
31 切り札『アルテミス』 ―――― 150
32 月企業と月派閥 ―――― 155
33 ニュータイプ研究 ―――― 162
34 オデッサ作戦しているらしい ―――― 171
35 モビルスーツの時代 ―――― 175
36 裏取引の手引き ―――― 179
37 駒と情 ―――― 184
38 最後の1ピース ―――― 188
39 かつての上司 ―――― 193
40 今の上司 ―――― 198
41 ジャブローからの刃 ―――― 205

００　転生者

地球連邦軍所属コウイチ・カルナギ大尉は、転生者である。
日本の首都東京より微妙に離れた地方で生まれ、一流でもない微妙な学校に進学をし、大企業ではない中小企業に入社した。
そして、特に波乱に満ちたわけでもなく、結婚することもなく、心不全によって突然死した。彼はごく普通に弔われ、人生の終焉を迎える。
何か彼の特筆すべきものを上げろと言われれば、ただ一つ。
彼はガンダムオタクだったのだ。

諸君。
君が機動戦士ガンダムが大好きで、シリーズ全話をビデオ時代から閲覧し、様々なハードで発売された様々なゲームを遊び倒し、数々のプラモデルを作っては生活スペースを圧迫し、出版された様々な漫画や小説を買いあさるほどガンダムが大好きだったとしよう。
そんな自分が、ガンダムの世界に転生したらどうする？

そりゃ、モビルスーツに乗っちゃうだろ。
既存知識で勝ち馬にのってウハウハするとかいろいろあるが、とりあえずモビルスーツ。できるなら専用機。さらに贅沢をいうなら、ニュータイプでファンネルで無双しまくる。
誰だって、そうする。
オレだって、そうする。
そんなわけで、オレの人生は、自我が芽生えた段階で確定していた。
オレの人生は勝ち組であった。
オレの父親は地球連邦軍の将校で上流家庭。
父方の家系は先祖代々軍人。
幼いころから軍人になるべく、体を鍛え、勉学に励む。
悪くはない成績、親の欲目と、本人のぶれることない将来設計。
予定通り士官学校に入学。
そして、オレの人生のピークはこの時までであった。
【対衝撃機能欠損症】
短期間で高いGの変動が起こる際、人体で当然起こる血圧の調整機能に欠損がある病気である。

つまりどういう事か。
打ち上げシャトルの発進で生死の境をさまよい。コロニーの軌道エレベーターで病院送り。戦闘機のシミュレーターなんぞしようものなら、酸っぱい匂いが充満する。
原因は不明、治療も不明、先天的な症状とされていた。
モビルスーツにのるなんて不可能です。本当にありがとうございました。
士官学校入学時の健康診断で、発覚したこの症状を聞いて絶望したね。
２０歳を超えた成人男子が、声を上げて泣いたよ。あれは、いい経験だった。
と、今なら振り返れるが、当時はどん底でした。
欠陥がみつかってから、それまでチヤホヤしていた家族が没交渉。連絡一切なし。入学式も卒業式もオレ一人。配属先に関してもコメントどころか連絡もなし。実家への連絡は留守番電話にメッセージを入れるだけだった。
今思えば、よくダークサイドに落ちなかったものだと思うのだが、運よくというか、悪運強くというか、当時まだ発言力と人数のいた人権団体というやつのおかげか、こんな状態のオレでも、士官学校で教育を受けて卒業し、地球連邦軍の新米少尉になれた。
アニメキャラにもあったよ。それも二人。
一人は新任でジャブローの経理部に配属されたときに、ワシ鼻の悪役っぽい顔のおじいちゃん。

そう、後のティターンズ指令ジャミトフ・ハイマン大佐。
もう、人間計算機でいつ寝ているんだって人だった。しょっちゅう怒られたけど、かわいがられたんだと思う。何度か個人的に飲みに連れて行ってもらい、いろいろ薫陶をもらったものである。どうでもいいが、この人カラオケが上手かった。
で、もう一人が、経理部を異動した後、月面基地の監査官だった時の上司である。
ジョン・コーウェン准将。
ゴリラである。原作では、質実剛健の軍人でござい的なキャラだったのに、もうゴリラ。月にいる高級官僚なんて、月企業の接待攻撃でズブズブなんだけど、そういったお店で金髪半裸のおねえちゃんをヒザの上に乗っけて、おっぱいプルプルさせてた時の、鼻の下の伸びた顔は、マジゴリラ。動物園の飼育員もバナナ投げちゃうレベルである。
まあ、オレもその腰ぎんちゃくよろしくサルだったんだけどね。
まあ、なんでこんな話をしているかというと。
今目の前にいるわけだ。
ジョン・コーウェン准将が。
「久しぶりだね。カルナギ少佐」

この日、コウイチ・カルナギ大尉は、この世から消えた。
代わりに新しくコウイチ・カルナギ少佐が現れた。
新しい階級章と。
たっぷりの厄介ごとを抱えて。

01　一年戦争背景

そもそも、アニメやゲームでは色々あって開戦した理由なんかはぼかしていたが、この時代で30年を過ごすと、さすがにこの時代はやばい事が見えてくる。

その最大の理由は「少子化」。

現代日本でも社会現象になっているが、それが地球規模であると思えばいい。

そもそも、増えすぎた人口により人類は宇宙に出て新しい生活圏を作った。

そうなる前、地球では増えすぎた人口の統制が急務であり教育や価値観も、それに準ずるものであった。

が、宇宙世紀に入り宇宙に生活圏が広がると、人類にとって待望の的であった「自分だけの空間」を手に入れる。

国民は歓喜し、政府は上がる支持率に鼻高々だった。

そして、そのまま価値観の変更をせずに時間が進む。人口過密により密接な関係を余儀なくされていた者達が、自分だけの空間を手に入れ、自由というのを手に入れた結果、コミュニケーション能力の低下による結婚率の低下、コミュニティーからの孤立、精神病の増加、孤独死。まあ、そんな感じで、出生率は見るに堪えない状況になっていった。

それでも早期対応していればよかったのだが、一部の有識者の警鐘も、宇宙開拓熱狂の陰に埋もれ、消えていく。

そして、ようやく宇宙開拓に陰りが見えた宇宙世紀５０年代に、この問題が爆発した。

これに対し政府がとった対策はまさにお粗末な一言で「子沢山政策」とか「結婚優遇制度」一部では「重婚法案」なんてものも議会を通りそうになったほどだ。

そんな場当たり的な対策の結果、中間年齢層の空洞化という社会問題が発生する。政府は「平均年齢」なる数字上のごまかしで、言い逃れをしていたが継承問題による技術力の低下、経験未習熟者によるイージーミスからの大規模障害は頻度をまし、地球の経済は大きく衰退する。

これに対し、地球連邦はその損失を埋めるために、スペースコロニーに目を付けた。明らかにあてつけのような地球連邦政府からの命令にスペースノイドは憤ったのは当然であった。が、当時それができる余裕があったのがスペースコロニーだけだったというのもの事実である。

まあ、そんなわけでスペースノイドとアースノイドの確執は増し…

宇宙世紀００７９．０１．０３。

地球より最も離れたスペースコロニーサイド３は、地球連邦に対し宣戦を布告。開戦後、コロニー壊滅と、コロニー落としにより、人類の人口は半分になった。

地球連邦とジオンの決定的な戦力差を覆したのが、ジオン軍の開発した巨大人型兵器モビルスーツである。
この新兵器と新戦術に、愚鈍な巨獣と化した地球連邦は後手後手に回り、敗戦を重ねる。
わずか2か月で、地球上の3分の1がジオンの勢力下に落ち、なお劣勢なのである。

「モビルスーツ開発ですか?」
「そうだ。今の地球連邦の苦境はひとえに、敵の新兵器モビルスーツにあることは周知の事実だ。我々は早急に対応する必要がある」
ジャブローの一室で、書類に埋もれた自分のデスクを背に、ジョン・コーウェン准将がオレに説明していた。
「そのために、レビル将軍の指揮の元、地球連邦軍のモビルスーツが必要不可欠なのだ」
熱弁を振るうコーウェン准将を前に、俺は思い出す。
ジオンの独立戦争。のちに「一年戦争」といわれる開戦をオレは知っていた。なので、安全なジャブローへの配置転換を数年前から工作し、見事ジャブローの一室で、たいして他に影響の出ない仕事を繰り返していたのだ。
後に一週間戦争とよばれる開戦当初の地球連邦軍の連戦連敗どころか、連戦惨敗の中

で、父親が戦死したり、親族の多くに死傷者が出ていたりしたが、実家からの連絡はなかったし、十数年音信不通の実家と両親に、何の感情も浮かばなかった。オレ的にこの戦争による不利益らしい不利益と言ったらその程度である。

「君に、その統括を任せたいのだ」

ちょっとまて、お前の仕事はどうしたゴリラ。

02　連邦軍モビルスーツ開発計画

「少佐。君には期待している」
「はっ？」
　あの、意味わかんないんですが。
　いぶかしむ俺をよそに、コーウェン将軍は言葉を続ける。
「君の能力は私もよく知っている」
　将軍といたのって2年もなかったんですけどね。
「私は君に、この反攻作戦の中核を任せたいと思っている。君しかできんことだ。君にしか任せられん。難しい仕事であることは理解している。私も全力でサポートするつもりだ」
「閣下。自分にその計画の総括をしろと言っているのですか？」
　どう見ても、佐官クラスの仕事じゃねぇよ。ってか、それはお前の仕事だろ。
「本来なら、それは私の仕事でもある。だが、現在のジャブローでは、それができん」
　コーウェン将軍は、窓の外の天井のある風景を見る。
「月にいた私はここでは外様だ。旧態依然としたこの地では、私のような外様は手足を

もぎ取られているようなものなのだ。笑ってくれ。月にいた私が、地球で息をすることにすら苦労する始末なのだ」

将軍はデスクの上の大きな封筒を手に取ると、オレに渡す。

「ジオンの新兵器に対抗するには、老人の凝り固まった価値観ではなく、若者の柔軟な発想が必要だ。君にはそれがあると私は確信している。佐官用の個室の用意がある。君の補佐をするための従卒もつけた。優秀な秘書官だ。必要なものは、彼女に言えば用意しよう。私も最大限努力する。以上だ」

５分後。

ふっざけるなぁぁぁぁぁ!!

おめえが楽したいだけじゃねぇか。

なにが、「息をする事すら苦労する始末だ」だ。うまい事言ったつもりかよ。

つまりあれか、オレはお前の腰ぎんちゃくよろしく、「コーウェン准将の命令で」を繰り返して、調整を取って、しかも失敗したら「君には失望したよ」か!?

お前が、ジャブローでおっぱいプルプル接待に鼻の下伸ばしているときに、オレは技術士官とスケジュール調整してろってか!?

どこからどう見ても１００％間違いなく完全無欠に「エリートのいる地球で職務そっ

ちのけでコネ作りに来てる」だけじゃねぇかよ。
ひとしきり暴れてみたが、そもそも軍は縦社会。准将と大尉（少佐だけど）には、でっかい開きがあるわけで、断る事すらできん。
ましてや、連邦の反攻作戦の要である。「やっぱなし」ともできないのが現状だ。
連邦の量産ＭＳであるジムを作れって話なら、そう難しい事でもあるまい。
とりあえず、思いっきり地面にたたきつけてぐしゃぐしゃにした帽子をクリーニングしてもらう事を、従卒にお願いする事にしよう。

０３　派閥

派閥派閥派閥。

人間３人いれば派閥ができるというが、数万単位の秘密地下都市ジャブローは、まさしく派閥で構成されている。

一般的なところで行けば、レビル将軍の主戦派閥に、その前に主流だった保守派閥。もちろん、そのどちらか一色というわけではなく、玉虫色の中立派まで、カオスの坩堝といえるだろう。

オレの新しい（そして、後のない）仕事も、この派閥の呪縛から逃れられる理由もなく、ざっと眺めただけで、まさしく派閥が出来上がっていた。

しかも、すっごいやばいレベルで集まっている。

まず、既存派閥。地球連邦軍の持つ軍需産業の技術者達だ。これが最大数を誇っている。連邦軍本部ジャブローだから当然といえる。もっとも、この派閥も一枚岩ではなく、地上兵器派や宇宙兵器派に始まり、戦車、航空機、潜水艦、はては誘導兵器や、攻撃兵器派とか様々だ。もっとも、先のルウム戦役によりその影響力はトップ安の急下降を現在進行中。

で、それに対抗するのが、新興勢力のＭＳ研究者。正確に言うと新理論派だ。こいつが代わりに勢力を増している状況だ。そりゃ、地球連邦軍の最大派閥のレビル将軍の号令で招集されているわけだ、デカい顔するのもうなずける。

問題があるとすれば、その折衝をするのが俺って事なんだけどな。

なにせ、前任者の残したものを見ると、もう無残としか言いようがないわけだ。正気かよと疑いたくなる。

既存派閥にいい顔をして、新勢力をまとめて研究させて、予算をザブザブにする。

折衝どころか区分けして終了。だから、ＭＳ開発を目的とする『Ｖ作戦』なのに、新型航空機の開発とか、運用システムの構築とか、素敵な項目が目白押し。

まあ、原作知識がある点で、そのほとんどが有効利用できると推測できるからスゴイ。新型航空機ってこれコアファイター?とか、運用システムってこれホワイトベースの運用計画ベースにすりゃいいんじゃないか?とかだ。

とはいえ、不可解すぎる。前任者の目的が見えない。前任者も転生者だったのか?少し調べる必要があるな。

後、もう一つ。最大の問題。

『Ｖ作戦』の案件内容を確認するんだが（極秘資料だよ）。

これ、どう見てもガンダム製造計画なんだよね。

うん、『Ｖ作戦』としては問題ない。
でも、ガンタンクも、ガンキャノンも、ホワイトベースも、コアファイターもないのよ。合体分離機能なんて存在しない。あくまで、ザクの対抗機として、連邦用の高性能ＭＳガンダムを作る。
これが趣旨なわけだ。
ジムどこいった？
とりあえず、ビジフォンをコールして、従卒という秘書官のマリドリッド伍長を呼び出す。
「はい。」
「伍長。アポイントメントを頼む。」

０４　ジャミトフ＝ハイマン

「ジャミトフ大佐」
　経理部に入り敬礼すると、デスクに座っていた壮年の佐官がこちらを向く。
「ああ、君か」
「ご挨拶に伺いました」
「なるほど……」
　そういうと、奥の応接室に連れて行かれる。
「出世したな。このままでは早々に追い抜かされるだろう」
「まさか、せいぜいここまでの男ですよ。私は」
「そうもいくまい。今回の件がうまくいけば、昇進は確実だ」
「ご存知でしたか？」
「当然だ。あの計画は最重要事項だ。うまくいけばな」
「難しいと？」
「楽だとはおもわんよ。君もそれは感じておるのだろう」
「まあ、なんとかなると思っていますがね」

オレの答えに、ジャミトフは少し驚いたようだ。
「……前から思っていたのだが、君は時々、そういう風に言うな」
何かを確かめるような視線に首をひねる。
「何か問題がありましたか？」
俺の問いに、軽く唇を持ち上げる。
「いや、今日は早めに上がる。連絡しよう」
「よろしくお願いします」

その夜、ジャブローの高級官僚行きつけのバーの一室、色気皆無な状況で、気持ちは若いがおっさんと、どう見ても悪役顔の老人がいた。
「前任者のイーサン大佐は、名目上はレビル派閥だが、穏健派のヒモ付きだ」
グラスを傾けながら、世間話をするようにジャミトフ大佐が事情を教えてくれる。
つまるところ、前任者はＭＳ開発計画をとん挫させ、それを手土産に穏健派に鞍替えする気だ。
「開発計画をつぶす気で？それで勝てると？」
「君は違う意見か？」
「……」

不可能ではない。ゲームでもＭＳを開発せず既存兵器の物量でジオンに勝つことは不可能ではない。しかし、それはゲーム上での話だ。

「そもそもＭＳ作戦に連邦首脳は懐疑的だ。予算編成も段階的に降ろさざるを得ない」

つまり、現段階において、１次予算、２次予算という形でＶ作戦の予算は進行段階の報告を承認する形での決算になる。当然、予算案が通らなければ即終了だ。

コーウェン准将がジャブローでコネを作るというのは、個人的嗜好だけではなく、逐次予算承認の際に支持派を増やすための事でもあったわけだ。ゴリラと言って御免准将。

「１次予算はレビル将軍の顔で降りた。それが現状だ」

「二次予算の裁可はいつ？」

「未定だ」

終わっているじゃん。そうか、だから既存兵器の開発もこっち回ってきているんだ。余計なものに予算を使わせて、こちらの開発能力をなくせば、ロクな成果も出ていないのに次の予算が通るわけがない。

そして、すでに１次予算の配分は前任者のイーサンによって振り分けられている。素敵な事に、ＭＳ開発はひとまとめだ。

はは、詰んでら。

ただし、「原作知識がないならば」という注釈が付く。
顔も見たことのない前任者にヘイトをためながら、口元に笑みが浮かぶ。ここから巻き返したら、前任者どうなるだろう。梯子外されるんだよな。しかも自滅で。
「前にも言ったが、君は緊急事態になるほど張り切るな」
ジャミトフ大佐に言葉に、現実に意識を戻す。
「いま、特別予算の枠決めを行っている」
大佐の言葉はまさに経理部の伝家の宝刀である。そして、それはめったに抜かれる事はない…はずだ。
「なぜ?」
「レビルに恩を売れる。今更泥の一つをかぶろうと、主戦派が連邦の手綱を取ることは確定しておる。穏健派に再起のめどはない」
うっわ～。やばい事になってきた。
何がって、オレの職権を大きく超えるお話になってきているって事だ。この特別予算に食らいつけば、とりあえずのめどは立つ。しかし、それをするにはオレがコーウェン准将に泣きつき、コーウェン准将がレビルに泣きつき、結果レビルがジャミトフに泣きつく流れになる。つまり、V作戦の功績は経理部が尻拭いをしたからという名目が立

つ。最初に泣きつくオレが尻を汚した主犯としてつるし上げられればだ。
そして、何を隠そう、そうなることを半分予想してコーウェン准将が俺を選び、そしてジャミトフ大佐がこの話をしているわけだ。どうりで、数年越しにコーウェン准将が俺を呼び寄せて、ジャミトフ大佐とのアポが即日可能になるわけだ。
オレが、着任している段階でこの人たちスタートして最初のコーナー曲がっているじゃん。当たり前だけどよーいドンじゃねぇぞ。
とはいえ、このまま想定通りというわけにもいかない。
一応、こっちもクビがかかってるからね。
「必要ならそうしましょう」
「……なるほど」
オレの返事を聞いてしばらく俺を見ていたジャミトフ大佐は、口元に笑みを浮かべてグラスに口をつけた。
「手があるか」
「なにがです?」
オレのごまかしを鼻で笑う。
「君は、分かりやすい人間だよ。絶望的な状況で笑えるような、タガの外れた人間じゃない。笑えるときに笑う人間だ」

ああ、つまり俺がおた付かずに笑った段階で、現状の解決が見えていると大佐は見抜いていたわけか。あれ？　じゃあなんて、特別予算の話をしてくれたんだ？

……ああ。

「ご迷惑おかけします」

やはり、オレはこの人にかわいがられていたらしい。

05　V作戦始動

「テム＝レイ大尉です」
「はじめまして。カルナギ少佐です。よろしくお願いします」
そういって、レイ大尉は慣れない敬礼する。
ひゃっほう。原作キャラ3人目。しかも、後のテム＝レイ回路（ネタアイテム）の開発者ジャン。
一応、彼がＭＳ開発チームにおけるオレとの窓口になってくれる総括者である。
笑ったね。自称インテリ集団と話をして、まともに話のできる人がこの人しかいなかった。
知ってのとおり、ＭＳ技術開発者って、それまでの冷や飯食らいの、マイナー路線の技術者ばかりなんだ。それが、それまでの主流派を下しての大躍進だ。バリバリテンションアゲアゲで、ＭＳ開発をしている。だが、この人たち当然ジャブローの慣習や慣例を全く知らない。そもそも、営業的な話ができない。
中小企業のワンマン社長が、軍産複合体のやり取りに入ってくるようなもんだ。もう、致命的アウトって話で、その辺のフィルターとしてオレがいるわけだ。

とはいえ、俺だって万能なわけじゃない、専門技術とか俺もさっぱりわからないため、比較的社会常識に精通したテム＝レイさんが、オレと技術者の窓口になってもらうわけだ。

いやはや、ＭＳ開発各部門の大御所と話して致命的問題に気が付いて涙目だったオレに、テム＝レイさんは天使に見えたね。まあ、オレはフォローする仕事なのは変わらないわけだけど。

「彼らは専門家ではありますが、それ以上の汎用的な技術者ではありません」

「解析と並行で開発を行わせることは？」

「可能です。というか、現状ではその形で行くしかないでしょう」

「解析が終わり次第解析チームを解散させ、開発チームに再編成する」

基本的に、技術馬鹿系の大御所をトップにして、各チームを形成。解析終了段階で細分化してチーム分けして個別開発。最終的に統合という、なんともデンジャラスな組織図を作り上げる。

なにがデンジャラスって、最後の統合部分のウェイトがはんぱなくデカい事だ。

だって仕方ないじゃん。予算限られてるんだもん。最初に普通に回してたら実験費用だけで破たんする気満々ジャン。

同時に、人的能力の限界も越えておる。つまり、オレの処理能力だ。だってこれ、Ｍ

Ｓ開発の新部門派だけの話よ。前にも言ったけど、従来兵器の開発に関しても、同じような話をこの後するわけよ。

当然、その管理もするわけだから、まっとうに部門統括して管理していたら、オレがあと３人は必要になる計算だ!?

というわけで、「そっちはそっちでよろしくやってね」的にチーム編成でやってもらうしかない。

技術者トップで勝手に解析し、勝手に開発してもらう。で、最後にすり合わせ。

うん、言ってて寒気が走ってきたわ。ＬＥＧＯとゾイドとガンプラで作ったパーツをすり合わせて一体のロボットを組み立てる作業といえば、ヤバさを理解してくれるだろうか？

つまり、最終摺合せの段階で形になるようにしておく必要がある事と、さらにそれと並行で、開発が進めば進むほど管理が面倒くさくなるオレの仕事量が破たんしないように、調整する必要があるわけだ。

うわ。泣きたくなってきた。

０６　パワハラ

とりあえず、各部門のチーム分けと解析＆開発作業が逐次始まった。Ｖ作戦がスタートしたといってもいいだろう。

残念な事にオレは天才でも、ニュータイプでもなく、ただの原作知識もちの転生者である。

なので、画期的なアイデアがあるわけではない、ただ、ＭＳシステム運用に関して、宇宙船開発の派閥の人に、ホワイトベースっぽい巡洋艦の話を進言してみたり、コーウェン准将に頼み込んでＭＳの基礎システムを従来のジオンＭＳの物を改良するのではなく、新規開発するようお願いし、その為の人員を割いてもらっただけである。

それがアカンかった。

いっそ、お飾りの無能だと思われていればよかったのに、なまじ提案したが故に、発言力を有すると見られたのだ。

「少佐。いいですか？新兵器といっても、兵器は兵器。殲滅能力や迎撃能力という本来の目的は……」

大佐の階級章をつけたハゲたオヤジが、オレを呼びつけて自説を垂れているわけだが、なんだかご理解いただけるだろうか。

このおっさん、自分の派閥後援者である企業の主力商品である遠距離迎撃砲の重要性を説いて、ＭＳ開発に組み込めという自己中要求をオレにしているのだ。

そんなのコーウェン准将に言えよ。といいたいが、残念な事に大佐より准将の方が階級が高いためゴリ押しできず。結果、より階級の低い少佐にその矛先が向いたわけだ。

死ぬがよい。

と、ブチ切れるわけもないので、脂汗タラタラながしながら、データを一切提示しない経験談（しかも他人の）と、自分の中では完璧な戦術論を披露される。

何がひどいって、ここで「うん」と言おうものなら、機動戦士ガンダムが砲撃戦士ガンダムになってしまうゴリ押しが待っているのだ。それガンダムじゃねぇよガンキャノンだよ。ライバルも赤くて区別つかねぇよ。

「では、後日データと担当者を紹介ください。こちらの技術者と交えて意見交換しましょう」

１時間の主観完璧理論を聞き流し、話が一段落したところで区切る。必殺、「明言を避け、後日話しましょう」作戦。

オレの力量ではこれくらいしか回避方法が思いつかん。少なくとも技術者は大佐よ

り階級低いはずだから縦社会を背景にしたゴリ押しは回避できるはず。
同行してもらう技術者に頭を下げる仕事が始まるけどな。
大佐のオフィスをでると、秘書官のマリドリット伍長が待っていてくれた。
冷や汗を含んだハンカチをポケットにしまいながら、一息入れるとミネラルウォーターのボトルを差し出される。
「お疲れ様です少佐」
「大佐から技術者を交えた面会があるかもしれない。その時はよろしく」
「了解しました。連絡があり次第報告いたします。同行する技術者への連絡はお願いいたします」
おかしい、面会が終わったのに面会の数が減っていない。空になったボトルをダストシュートに放り込み脱いでいた帽子をかぶり直す。
「……次は？」
ああ、聞きたくねぇ。
「トライト准将より２０分後です。エレカーはすでに待たせています」
たしか、航空機上がりの現場から成り上がった将校だったか？どう見ても、体育会系で押しが強いだろうな……
エレカーの中で端末から准将の来歴をしらべつつ嘆息する。

主な仕事は、善処しますを連呼する仕事です。

０７　英国紳士の無理難題

さて、オレことコウイチ＝カルナギの所属する地球連邦軍とはなにか、要は地球の主要国家の持つ軍事力を統合した連合軍なわけだ。それが、宇宙世紀の唯一にして最大の軍事力として地球圏の平和を守ってきた。

同時に、この連邦軍を管理する組織として、地球連邦政府というのがある。これがなにか？要は地球の主要国家の持つ政治家を統合した共和制の政治システムなわけだ。

なんで、こんな話をしているのかって？

コーウェン准将に呼び出されて、オフィスに行くとひょろりと背の高い高級官僚がいた。もう、高級官僚の見本のような金髪碧眼の白人。階級章は…大将？

「初めまして。カルナギ少佐。グリーン・ワイアットだ」

敬礼の返礼もそのままに、右手を取って握手させられる。

おお、原作キャラ４人目の紳士大将!?ダージリン大好きの人じゃないか。オレの好きな００８３シリーズで核攻撃のターゲットにされて消滅する英国紳士だ。

「は、はじめまして。コウイチ・カルナギであります」

「うむ。コーウェン准将から紹介されてね。是非、君の力を借りたい」
あの、右手を放してくれませんか？
オレの心の声など聞こえるわけもなく、ダージリン…もといワイアット大将は言葉を続ける。
「現在、地球圏の惨状は目に余るものがある。ジオンの卑劣な策略により、地球連邦政府は、苦戦をしいられている。彼らに支配された無辜なる民が苦渋に満ちた生活を私は憂いているのだ」
思いっきり知らんがな。
お前らで、ウラーでも万歳突撃でもして奪還しろよ。オレになにしろってんだ？
「現在、連邦が乾坤一擲の反攻作戦を計画しているのは理解している。しかし、正義の一撃を欲しているのは今なのだよ」
チラリとコーウェン准将の方を見ると、露骨に視線をそらされた。
そういう事か……
ようするに、「オレにも一枚かませろ」攻勢から、逃げられなかったんだな。
先に説明した通り、地球連邦軍は地球各国の軍事力の連合体だ。そのバックボーンを地元国家に根差している。
すでに3度の降下作戦により地球の半分近くを奪われた。当然、奪われた側の政治家

や軍人はたまったものではない、敵に故郷を奪われているという事は自分の権力基盤を奪われたに等しい。連邦的に今は忍耐の時であるといわれても、「連邦政府が明日勝てもオレたちは今日負けるんだよ」と叫びたいわけだ。当然軍人だって高級官僚になれば政治と無縁でいられるわけじゃない。そういった、地元から圧力をくらって尻に火がつくのもやむなしという事だ。

オレには全く関係ないがな!!

忙しい中で呼び出して何言ってんだこの紅茶。緑茶ぶっけるぞ!!

「もちろんです。ワイアット閣下の憂慮は理解しておりますとも」

オレが不機嫌になってきていると理解したのだろう。コーウェン准将が横からしゃしゃり出てきた。おい、お前は何勝手に返事しているんだ?

「やはり、准将は私の心を理解してくれる高潔な人材のようだ。ありがとう。よろしく頼むぞ」

ほらみろ、そっこう突っ込まれたじゃないか。

そのまま上機嫌で、話をまとめてにこやかにオフィスから出ていくワイアット大将。

大将退出後、オレの氷の視線を受けて、苦笑いを浮かべつつ

「少佐。すまないが何とかしてくれないか?」

「閣下。現在Ｖ作戦は始動段階で実戦投入が可能なものではありません」

「わかっている。わかってはいるが、そこを無理にという話だ」
「突っぱねるわけにはいかんのですか？」
「ワイアット大将は欧州の重鎮だ。宇宙艦隊ともつながりが深い。彼の縁戚もジャブローには多いのだ」
やっぱりアイツはブリテン出身の英国紳士なのか。
「だが、彼がコチラについてくれれば、いまある面倒のいくつかは解決する」
……そういう事か。今までの、無理難題オレにもかませろ攻勢は、このための布石か。
こちらの要求に答えてくれるなら、鬱陶しい面倒なこれらを控えるようにらみを利かせますよって話か。素敵な交渉術だよ。裏で、煽っていたのも英国紳士でしたという真相があっても驚きはしないぞ。
「同時に、ここで彼の要望に応えれば、こちら側に取り込むことができる」
確かに、ワイアット大将の要望にV作戦側が配慮すれば「英国紳士とV作戦側（つまりレビル派）は仲良し」という図式が成り上がる。英国紳士の真意はともかく、レビル派閥は巨大派閥との友好を対外的に示すことができるわけだ。
「下手に突っ込まれて、何もかも向こう持っていかれるわけにはいきませんよ」
「もちろんだ。その一線はキチンと引く。もっとも、向こうもそこまではしないだろうがな」

Ｖ作戦を引っ張り込んだ挙句失敗して炎上とか、そんな危険を冒すわけないか。となると、あくまでこちらとのつなぎか…なるほど、オレの心配は杞憂か。

「では、報告は後程」

「うむ。貴殿の奮闘に期待している」

お前も戦えよ。

０８　モビルスーツモドキ

「無理難題をおっしゃられる」
「わかっています」
　呆れ顔のテム＝レイ大尉を前に、オレも肩をすくめる。
「まだ解析すら終わってないところがあるのに、開発成果を求められても困ります」
「わかっていますよ」
　というわけで、あのあとコーウェン准将のオフィスから戻って、自分の所にあげられた書類から、必要なものをかき集めて、大まかな形にしてからレイ大尉に話を持ってきたのだ。
「だから、ＭＳ開発の成果を乗せない形でＭＳを作ってしまえばいい」
　と、集めた資料と一緒に、適当に描いたラフ画を出す。
　つまり、ガンタンク計画である。
「めちゃくちゃだ！」
　悲鳴を上げるレイ大尉。これをモビルスーツですと言い放ったらそりゃ詐欺だろう。
「二足歩行は、解析が終わっただけなのでオミットする。戦車のキャタピラをつけても

らって機動力を確保。主兵装は遠距離砲撃だ。下半身がこれだ白兵戦は考慮しないで……」

「少佐！」

バンッ！

オレの言葉を遮るようにレイ大尉が机をたたく。

「もうしわけないが、こんなマガイ物を作る為に、ウチから人は割けませんよ」

お～、怒ってる怒ってる。でもそれは想定内。

「当たり前だ」

オレの言葉にレイ大尉も返答に困る。

「いいかね？　下半身のキャタピラは既存の戦車部門に丸投げする。主兵装の遠距離砲も陸上部隊の物を流用しよう。索敵用のモニターも通信システムも既存のモノがある。君たちの出番がどこにある？」

「……両腕のマニピュレーターでしょうか？」

「よし。ではそこも無くそう。そこはバルカンに変更だ、武器管制もほとんどいらなくなるな」

「……なにがしたいのです？」

そろそろ、こちらの意図を読み始めるレイ大尉。

「つまりだ。このＭＳモドキにモビルスーツ開発部門の手は不要だ。だが、ＭＳ開発するうえで、今使えるところはどこだ？」
「!!」
　ようやく、オレの意図が飲み込めたようだ。おれがレイ大尉にこの話を持ってきたのは、力を貸せという意味ではないのだ。今実行可能なレベルで、稼働テストが必要な場所はどこかという話なのだ。
　どうせ作るなら、ＭＳ開発と組ませて実践テストをしてしまおう。
　この計画の良い所は、旧兵器部門の主導で製作されるため、ＭＳ開発の技術が漏れる点だ。一見これは欠点ではあるが、こちらが漏らせる技術を選べるならば、その技術のすり合せを丸投げして、旧兵器部門の作るＭＳという結果の集大成を知ることができる点だ。
　幾ら向こうが主導とはいえ、どのみち統括はこちらなので情報は丸裸である。
「少佐の考えは？」
「姿勢制御とかは二足歩行になるから無用だ。私のもくろみは射撃システムだ。ＭＳの汎用性を生かすなら、その為の操縦の基礎を確立させたい。移動、射撃、回避。そのほかの基本的な行動だ」
　連邦のＭＳ開発はまだ初期段階である。しかし、白兵戦が主となるＭＳであっても、

その主武装は射撃武器だ。となれば、戦車のように停車してから砲撃ではなく、機動射撃の開発は不可欠であった。

……あれ？これがあのガンダムの双眼鏡型照準システムに発展するのか？

「確かに。しかし、それだけでは不十分です」

「というと？」

「集団戦闘では情報の共有化が必要不可欠です。観測、通信、データ共有とその解析情報があれば、今は不要でも、後のＭＳ用兵器に武器管制が役に立ちます」

「なるほど。となるとソフトウェアで…いやいや、待てよ待てよ」

レイ大尉の言葉に、オレの中でひらめく物があった。

「少佐？」

「そうか。情報収集用の中核（コア）を作ればいいんだ」

「はい？」

「つまり、情報を記録して集約する装置を用意するのさ。さっき言っていた観測や解析データ、操縦の基本情報を集積し、最終的にまとめるシステムを積み込ませるのさ」

「そこまで高性能な情報処理システムを組み込む余裕が……」

「ある！」

身を乗り出したオレの断言にレイ大尉がのけぞる。

原作知識万歳。つまり、教育型コンピューターと、コアファイターだ。

そうか、だからコアファイターなんだ。

ガンタンクのハードウェアを作る陸上兵器部門に、解析作業でピークになっているＭＳ開発部門。彼らにそんなものを作る余裕はない。そんな事ができる余裕がある部門は一つしかない。

旧兵器部門の二大トップは陸上車両系と、航空機系だ。新規ＭＳを陸上系にまかせながら、その中核となる教育型コンピューターを航空系に振り分ける。こうする事で、双方がＭＳの主導を握ることを抑止できる。

そして、最終的にＭＳ開発部門が「両方（の経験）を美味しくいただきました」になる。

教育型コンピューターは、ＭＳ開発後は無用のものになるし、新規ＭＳ（ガンタンク）は正規ＭＳ（ガンダム＆ジム）にとって代わられるからだ。その利権のすべてを双方に差し出しても問題ない。

なにこの孔明の罠レベルの名采配!?　大事な事なのでもう一度言っておこう。原作知識万歳。

「すばらしい。カルナギ少佐。早急に上にあげる事にするよ」

あの後、レイ大尉と煮詰めて３日で草案まとめて提出されれば、コーウェン准将だって満面の笑みだろう。

あ、そうだ。ついでに、

「いっそ、この時期に二次予算申請すれば、どこからも文句でないんじゃないですかね？」

従来兵器部門をヨイショした後だから、この恩を最大限に売りつければ、予算案決議で賛同してもらえる可能性もある。

「それは早計だな。この時期に予算が下りたら旧兵器部門に予算を持っていかれるぞ」

「そうですか……」

さすがに、そこまで何もかも上手くはいかないか……

09　つかの間

なんという名采配。

そのおかげで平和な日々を過ごさせてもらっています。

あのあと、ワイアット大将がわざわざオレの部屋にまで来て激励してもらい「うちの派閥にこない？」的な誘いもあったが、「ソロモンよ！私は帰ってきた！」されたくないので、失礼にならないように遠慮しておいた。

とりあえず、ワイアット大将の睨みが効いたのか、右下がりでパワハラ面会も減り、各部門の統括という本来の仕事に従事できるようになった。

さらに、頑張る戦車部門が急ピッチでガンタンクの製造し、わずか1ヵ月で生産ラインに乗せたらしい。

これだけでもすごいのだが、すごいのは航空部門もである。同期間で高性能データ集積コンピューターを完成させ、ガンタンクに取りつけている。さすがに、分離脱出機能にまでは手が回らなかったらしいが、代用的な脱出機能と、データ保持の自爆能力を備え、その上で戦闘機型脱出機能つまり、コアファイター機能を提案＆開発しているらしい。

双方の底力に戦慄を隠しきれないわ。
その後、完成したガンタンクを使ってエジプトの方で大規模戦闘があったらしい。
なんというか、あれだけ話を持って行ったときは「心の友」扱いだったのに、いざ、生産が開始されたら情報すら来なくなるなんて、どこのＴＶ版ジャイアンだよ。
まあ、いいけどね。とりあえず、陸上系の人たちにプンスコ抗議をして仲が悪くなったポーズを見せつつ、航空部門から集めたデータをＭＳ開発に回すから。ぶっちゃけ、ガンタンクがどう撃破されたかなんてどうでもいいわ。

ピーッピーッピーッ
現在、安全メットをかぶってトーチカみたいな場所から、双眼鏡でのぞく先に、二本の機械でできた建造物があった。
なんてことはない、現在二足歩行のテストの真っ最中である。
ちなみに、このテストの最高責任者はオレ。コウイチ＝カルナギ少佐である。
その為、万が一の事故を防ぐために、遠く離れたトーチカから双眼鏡で、二足歩行テストを確認。
なんで、ここまでするかって？
そりゃ、モビルスーツって核融合炉を積んでいるからだよ。

詰んじゃっているんだよ……
まあ、実際に最悪の事故になったら、この程度のトーチカじゃ意味ないんだけどね。
それ故に、コーウェン准将以下「オレにもかませろ」パワハラ上官もここにはいない。
オレ最高管理責任者。
笑えよ畜生。
「テスト。オールグリーン…クリア」
テスト地点のオペレータが流す音声を聞きつつ祈るように双眼鏡を握る。
転ぶなよ…転ぶなよ…
と、そこで二本の足がバランスを崩した。
ズズ…ン
「お、おう……」
一瞬腰が引けたが、爆発するようなこともなく。補助アームを使って起き上がる。
「テスト。オールグリーン…クリア」
転倒テストかい!?
見れば、きちんとテスト項目に記載されていました。ごめんなさい。
この日、５８０ｍの歩行走行テストはすべて無事に終わり、連邦軍は二足歩行兵器の開発へ本格的に稼働したのである。

うちも頑張ってるわ。

10　会議室

平穏な時が訪れているといっても、何もしない日々なわけではなく、ジオンとの開戦以来立て直しを図る連邦組織は多忙を極めていた。

ぶっちゃけV作戦開始当初、明らかにMS開発ではない旧来兵器開発が、こちらに回っていたのは、軍事力の再編成で旧兵器部門が限界オーバーまで酷使されていたからしい。従来兵器開発をいったん外す名目で持ってこられただけのようだ。

その中でV作戦に必要な計画だけこちらで保持し、それ以外を元部門に返却するお仕事があったりしたわけである。

全然知らなかったわ。結構他の開発計画食い漁ってしまったよ。

とりあえず、仲の悪くなった陸上系部門に、いらない計画を返却し、航空部門との詰め合わせを行う。

なんというか、航空部門のV作戦への力の入れようが、目の色変わっててちょっと怖い。

多分、犬猿の陸上部門から離れたころで、取り込めると思ったのだろう。さすがに、自分たちが本流ではないと見越した上での接触なので話が分かる。

ミデアやガンペリーなどの輸送部門から入る形で、話を調整しておく。
ああ、そうか。犬猿の仲だったから航空部隊による陸戦部隊の支援が、いまいちだったけど、ここにきて陸上系のヒモが切れた新兵器ＭＳが出てきたので、すり寄ってきてるのか。
まあ、陸上系も完全に切れてるわけじゃなくて、お義理とかマイナー路線での協調とかあるわけで、その辺の打ち合わせもオレの仕事である。

そんな状況で、連邦軍基地ジャブローの中枢ともいえる中央施設の、これまた奥にある大会議室。
周囲にいるのはどう見ても閣下と呼ばれる階級の者ばかり、佐官のオレですら間違いなく底辺ランクに位置する人ばかりだ。
オレの隣にはコーウェン准将が。つまりオレは、准将のおまけです。
なんで、オレがこんな大物重役会議に出席しているかというと。
『ジオン新兵器報告会議』
なる緊急会議に、コーウェン准将と一緒に出席するよう命じられたからだ。（正確には、准将に命令が来ただけで、オレは准将のお願いで出たに過ぎない）
ジオンの新兵器ってなんだ？　モビルアーマー？　でもあれって、どうみてもマイノ

リティーな機体だよね？　となるとニュータイプ専用機か!?
「これが、諜報部が持ち帰ったジオンの新兵器の映像です。」
司会らしい下士官の発言で、スクリーンに映像が映し出される。
そこは、どうやら製造工場のようで、巨大なクレーンや重機があり、その中央に『ジオンの新兵器』の断片が置かれている。
ザワザワザワ……
「おお……」
「ザクではないぞ……」
周囲の高級官僚から驚愕の声が漏れる。
そんな参加者とは完全に別で、オレは眉間に皺を寄せる。
どうみてもグフです。本当にありがとうございました。
脅かすなよ。グフの製造過程の映像ジャン。ああ、でも新兵器という意味では正しいのか。今までザクしかなかったジオンが作り出した新モデルだもんな。
映像に「ムぅ……」とか言ってるコーウェン将軍の横で、苦笑して背もたれによりかかる。
ジオンはグフを開発してるのか…ああ、そうか。そういう事か。
今ある現状とＭＳ―０７グフの開発について思いを巡らすオレとは関係なく、会議は

進んでいく。

だが、そのまま、会議が終わるかと思ったが、とんでもない爆弾がピンポイントで向かってきた。

「ああ、君。少佐か。何かあるようだが、どうかね？忌憚のない意見を聞きたいのだが。」

会議の中央。原作キャラの超重要人物にして、連邦軍の重鎮レビル将軍がオレにロックオンしていたのだ。

11　MS―07『グフ』

連邦軍本部ジャブローの中枢にある重役会議室で、派閥トップにして実質連邦軍の総指揮官から、指名を受けた中間管理職の心境を応えろ。

ライフカード！　ライフカード！

「はっ。カルナギ少佐であります」

反射的に立ち上がって、名乗りまでしてしまった。オワタ。

「うむ。何か気が付いたようだが」

「はっ。状況を確認した所、問題ないと思われます」

いやまて。オレは何を言ってるんだ？いやいや、そう結論付けたんだが、その過程をすっとばしているだろう!?

落ち着けオレ。一度言葉を切って大きく息を吸う。

「……失礼。少し取り乱しました。が、結論は先のとおりです。この新型に関してそう大きな問題ではありません」

周囲の高級官僚がザワザワと騒ぎ出している。注目の的だが、どうも一回りしたようで冷静になってきた。

レビル将軍は、両手を机の上で組むと興味深そうに眉毛の下からするどい視線を向けて、話を促す。

「まず、映像を戻してください。ええ、この大型シールドです。見えづらいですが左腕の指先が見えるでしょうか？　銃口になっています。おそらくバルカン砲です。それでいて、マニュピレーター機構を排除していない。これは、近接戦闘を主体とした機体である事を意味しています。つまり、モビルスーツ戦を想定した対連邦ＭＳ用機体です」

ザワザワがボリュームを増す。少し待って、収まるのを待つ。

「つまり、この大型シールドで砲撃を受け止めて接近し近接能力で圧倒して勝つ。どれほど威力のある砲撃でも接近戦ではその効力を発揮しません。この新機体の足首周りの解析がすめば、機動力や近接時の旋回能力が増加していることも判明するでしょう」

再びボリュームをあげようとする雑音を制するように、大声で結論を繰り返す。

「故に、問題ないと言えます。なぜなら、これは対ＲＸ―７５を想定したＭＳだからです」

すでに会議室の注目はオレ１００％だ。テンションあがってプレッシャーも感じなくなった。

「つまり、Ｖ作戦の根幹である連邦軍モビルスーツは白兵戦も想定した汎用機です。それも、現在のザクを圧倒的に超える性能を持っています。ＲＸ―７５に対抗した機体が

出てきたところで、連邦の新機体に対応しているわけではありません」
つまり、対ＲＸ―７５用モビルスーツとして開発されたグフだが、そもそもＲＸ―７５は試作機。それも本流から離れたジャンク機体だ。そんなもの対応用のＭＳをわざわざ労力使って作ってくれて、ありがとう。という話である。
「無論。Ｖ作戦が完了するまで、現在戦っているＲＸ―７５の被害が増えても無視しろという話ではありません」
最後に、一応フォロー。真っ青になっている陸戦部門の官僚に配慮しておく。
まあ、自分たちの作ったガンタンクに対抗したＭＳが作られている上に、連邦はそれとは全く別の構想でＭＳを開発していると知ったわけだ。自分達の未来はあまり明るくないと気が付いたらしい。
ガンタンクで戦果を上げて、ＭＳの主流をこっちに引き寄せて…っていければよかったんだろうけどね。ひっこめた手はもう差し出せないぜ。
「なるほど。君の意見はよくわかった」
ちらっと、顔面蒼白な派閥を見た後レビル将軍が締めくくる。
オレが椅子に座る。と、隣にいたコーウェン准将が、他から見えないテーブルの下でサムズアップポーズで激励してくれた。
とりあえず、大きく安堵の息を吐いた。

１２　目的は達成させるもの

あの後、会議は滞ることなく進み、オレの意見を取り入れた流れで進むことになった。

はからずも、オレの名前が高級官僚に売れた瞬間でもある。ここぞとばかりに、ワイアット大将が話しかけてきて、オレとのつながりをアピールしたりとかあったが。まあ、まだ様子見の人がほとんどだ。

帰りのエレカーまでコーウェン准将がつきっきりだった。満面の笑みで。

自分のオフィスに帰って、一つの分析をする。

今回の過程だ。対ガンタンク用にグフを開発した。それはなぜか。連邦の次期主力ＭＳがガンタンクだとジオンが誤認したとすれば、その理由がはっきりする。

はからずも、ガンタンクは旧兵器派の意をくんだＭＳだ。それまでの連邦の大艦巨砲主義を継承しているといってもいい。連邦のＭＳ構想がそうなるという誤解は十分にありうる話だ。

となれば、こちらの対応は決まっている。静観だ。誤解したまま、進めるだけ進んでもらおう。開発する時間と資材と人材を浪費してもらう。

しかし、重要なのはそうではないのだ。
オレが重要視しているのはそこではない。
オレの中で、今まであった様々な事が整理されていく。そうする事で、今までおこった事の理由を分析し、その後の行動を見直していく。
そして、一つの結論が導き出される。
「……これが策略か」
もしこれを意図的に行ったら？
その為には何が必要か？
その為には何をするか？
そう考えるのだ。
だから戦略。だから政略。
「ふッ。フフフフフ。ククククク」
戦術があり戦略があり政略があるではないのだ。
政略があり戦略があり戦術がある。
古来より、囲碁将棋チェス。戦場遊戯の多くを将軍はたしなんできた。
それはなぜか？
こう来たら、こう返す。

そんな物は小手先の技だ。そんなものを目的としてたしなんでいるわけではない。
本当に必要なのは、
『相手をどう動かすか』
なのだ。
「敵を知り己を知れば百戦危うからずや」
敵の分析がどれほど重要か。相手の思考を考え、相手の行動を考え、その行動に己が行動する事で修正をくわえ、目的を達する。
それは戦場だけの話ではない。戦場に立つ前に１００戦のうちの１戦は始まっているのだ。いや、そういう意味では１００戦の内９９戦は戦闘に入る前の策略の範囲に入る。
それは敵だけの話ではない。
ガンタンク作成での采配。
あれも同じだ。敵だから奪い、味方だから与えるというのは短慮でしかない。自分の目的のために敵であろうとも与え、味方であろうとも奪う。
結果、自分は目的を達成し、他の誰かはそこから利益を得る。
与える奪うが目的ではない。達成することが目的なのだ。
重用なのは目的を達成させる事。

そのために自分がどう動くのか、相手をどう動かすのか。

名将や名軍師が、戦場遊戯の巧者ではあっても王者でない理由はこれだ。遊戯に勝つために遊戯をしているわけではない。相手をどう動かすかが重要だから、ゲームの勝敗はその次なのだ。そんなものは、結果に過ぎない。遊戯の勝利を求めているわけではないのだ。

「戦いは二手三手先を読むものだ」赤い彗星の名言だ。だが、その読む舞台を作る段階が抜けているから、君は最後まで前線指揮官なんだよ。

そうなると、自分の優位性が見えてくる。

最終目標をどれだけ具体的にしているかが、優位になるのだ。しかし、それはより遠い未来を目標にするほど、不確定要素が加速度的に増えて行く。だから、すべての人間が、この戦争とその戦後しか見ていない。

この世でただ一人、オレを抜かして。

「ハ、ハハ、アハハハハ」

なんてチートだ。なんて反則だ。

オレは知っている。オレは未来を知っている。連邦軍とジオン軍。天才にも名将にも、その他の数多の将軍たちにも見えていないモノが見えている。そうだ、双方の陣営は勝利しか見えていない。勝利を目的にしかしていない。それは正しい。

だから、オレはその先を行ける。
この世の中でジオンが敗北し、ティターンズが起こり、エウーゴが対抗し、アクシズが帰還し、ネオジオンがアクシズを落とそうとして失敗する未来を想定している者はいない。
その為の、道筋を認識できる存在は一人だけだ。
その先に派生する諸問題にどう対処するかなんてどうでもいいのだ。
原作に持っていく事がオレの目的だ。その先がどうなるか知っているから、余計な選択肢を無視できる。
他の誰かは、無数の選択肢の中で最良の選択を模索する中、オレは最適解答を目指してすでに行動しているのだ。
これをチートと言わずに何といえよう。
ガンガンと蹴りつけるデスクから書類がバラバラと落ちる。
「ハハハハハ。ハーッハハハハハ！」
たった一人の笑い声だけ響かせて。

13　ガンダム量産計画の夢

俯瞰してみる。
言葉にすると簡単だが、凡人がそんな無謀な事すれば、妄想の世界にこんにちはである。天才であっても、不確定要素満載の雲の階段を上っているレベルだろう。
オレだって原作知識というチートがなければ不可能だ。
だが、それを含めた形で考慮すると、いくつか現段階で問題が出てくる。
その為に必要な、行動は……
ビジフォンをとって、秘書官に連絡する。
「マリドリット伍長。アポイントメントを頼む」

「ジャミトフ大佐。ご無沙汰ぶりです」
「うん。君か。活躍は聞いているよ」
数時間後、経理部に顔を出して、ジャミトフ大佐と面会する。
「なんとか、やりくりしていますよ」
「らしいな。おかげで二次予算が確定した」

ジャミトフ大佐の言葉に、驚きの声を上げる。
「Ｖ作戦の経過報告はまだなんですがね」
「報告会なぞ予算採決の項目を埋めるだけのものだ」
と言って少しとがった鼻を鳴らす。
「コーウェン准将に感謝したまえ。彼は顔に似合わずなかなかのやり手だ」
おお、さすがゴリラ。おっぱいプルプルに鼻の下を伸ばしているだけじゃないのか。
とりあえず、ジャミトフ大佐からも合格点をもらえたことで、こっちも本題に入ることにする。
「これを……」
持っていたファイルを提出する。
中を開けると、ジャミトフはふと意外そうな顔をする。そして、そのファイルを読み続けるうちに、その口元が不機嫌そうに結ばれる。
「……」
「Ｖ作戦の夢の構想ですよ。まあ、かなわない夢ですけどね」
何の事はない。このファイルは、現在のＶ作戦の想定予算を記載した経理報告書だ。
問題があるとすれば、量産するのがガンダムである点だ。
つまり、コスト度外視モビルスーツ製造計画だ。

なんというか、F1車を量産させる素敵仕様で、1台当たりの値段がブッ飛び状況に落ちたものである。
「現在V作戦は、この流れで動いています。二次予算まで降りてしまってね」
「……」
「なので、コイツを潰します」
ジャミトフ大佐が顔を上げる。
「コストを下げた量産機を作る計画に軌道修正させます。その為に、時間をいただきたい」
ジャミトフ大佐は、オレから視線を外すと目頭を押さえてしばし沈黙する。
「……恐ろしくなったな」
「は？」
「君だよ。何も変わっておらんが、読めなくなった」
どういうことだ？　ああ、そういう事か。致命的な問題を提示して、落ち着いて笑っており、しかもそれを、古巣とはいえ他部門他派閥のジャミトフ大佐に提示している現段階で、オレの意図が読めないって事か？
いや、そこまで深い考えはない。確かに、この問題はV作成の致命的弱点だ。これを突かれたら技術馬鹿オンリーの技術者ならともかく、連邦トップがGOサインを出すわ

けがない。そして、こんな問題、技術知識と経理知識があれば簡単に予測できる。
他の派閥がこれを提示しないのは、美味しい所でこの問題を爆発させてＭＳ開発の主導権を握りたいからだ。
そして、爆発させる起爆点が経理部だ。旧兵器部門がこの問題を提示したら壮絶な自爆ブーメランで「じゃあ、なんでもっと早く指摘しなかったんだ」とつるしあげを食らう。
その点、経理部門には、指摘する名分はあるし、指摘した所で経理が新兵器開発するわけがない。つまり、兵器部門の主導権争いに参加しないからだ。
だから、オレは事前に経理部門の現場最高責任者ジャミトフ大佐に持ち込んだ。
どこかの派閥がオレの知らないところで、この問題を提示しても、ジャミトフ大佐がストップしてくれれば、起爆剤は不発に終わる。
経理部門側でも、主導権を握っているレビル派閥に恩が売れる。現段階で、レビル派閥が大転倒して、ふたたび主導権交代なんて事があれば、連邦軍には致命傷である事を、ジャミトフ大佐はしっかり認識しているからだ。
「対処法はあるのだな」
「もちろんです。少し内側でゴタゴタしますが。１，２ヶ月もすれば収まるでしょう」
「少佐」

「はい？」

「そういう時は、期限を自分で決めない方がいい。確証があっても、それにメリットはない」

唇を持ち上げてニヤリと笑うジャミトフ大佐。

「はい。ありがとうございます」

笑って答えるが、どう見ても悪者の密談である。

１４　槍玉にビームライフル

研究者にして技術者の最大の欠点は何か？

「だから、こんな出力はいらないでしょう？」

「なにいってるんです!?　エネルギー効率が１２％も変わってくるんですよ。６％の消費増ですよ。２倍の効率なんですよ!!」

つまり、最高の技術で最高の性能を追い求める所である。

あれから、二次予算が正式に降りた。予算会議には出席しなかったがコーウェン准将から、連絡だけはもらった。

二次予算を皮切りに、おれはＶ作戦軌道変更計画（脳内）を発動させる。

その槍玉に挙がったのが、ビーム兵器チームである。

技術者にとって、最高の製品を最高の能力で提供するのが使命のようだが、残念な事に、顧客の要望に応えられなければ、それは無駄だという事を理解していないのが、致命的である。

当然、そこを突かせてもらう。

「エネルギー消費を６％上げる余裕なんてないですよ」
「まだ余剰キャパが十分あるだろう」
　なんで技術者って、割り当てられたエネルギー量を「最低ライン」という認識で物を作るのだろうか？　余裕をいれて多目に計算して提示しても、きっちり使い切った上に、さらにお代わりを要求する始末である。
「あれは、予備用のエネルギーです。割くわけにはいきません」
「これは、主武装となる新兵器だぞ。ここに全力を向けないでどうする？　鉄の棺桶でも作るのか？　我々は、君たち連邦軍の要求する戦艦の主砲クラスの武器を開発しているのだ。その性能を保持するために、全力を尽くしてくれる約束だぞ」
　そんな感じのビーム兵器開発リーダーの、押せ押せ交渉である。事実、２回ほどお代わりを要求され、少ないエネルギー配分をやりくりしてその要求には答えてきた。
「では、現状では、必要な性能の物は作れないと？」
「あと６％だ。６％だけでいい。頼む」
　強気で出て、その後に優しくする。まるでヤクザの交渉術のようだ。が、残念ながら見切ってしまえば、それまでである。
「現状の性能で兵器を開発していただくわけには？　性能の低下には目をつぶりましょう」

それができれば、そもそもお代わり要求なんてしないわけで。
「それができないから言っておるのだ、現段階でエネルギーの安定性が……」
ごまかすために専門技術でごちゃごちゃと煙に巻く。
「仕方ありません。では、ここまでにしましょう。プロジェクトは一時凍結させます。来月いっぱいで計画の調整を行いますので、開発資料の整理に努めてください。」
そういって、机に出した資料をまとめだす。一瞬ポカンとしていたリーダーさんが、怒ったように大声を出す。
「凍結ってどういう事だ！」
「こちらの提示する要件で製品を開発できないなら、開発作業を凍結するのはやむを得ないでしょう？」
「モビルスーツの主力武装だぞ!!」
「ええ、武装です。その為に、モビルスーツの開発計画をとん挫させるわけにはいきません」
最悪、ＭＳ開発計画においてビームサーベルだけでもあれば最低限（ほんとに最低の最低だが）は事足りる。
「ほかのどんな兵器が、ビーム兵器の代用になるっていうんだ？　１２０㎜の豆鉄砲か？」

「それは、今後の調整次第ですね」
「あんただってわからないわけじゃないだろう。どうせ、再開させる羽目になるんだ。あんたの経歴にだって傷が付くのは嫌だろう？」
脅し透かしになってきたけど、なんだかなぁ。まあ、元々マイナー技術畑の人だし、中小企業的には、これでも交渉で頑張っている方なのかもしれないか。
「私の経歴なぞ。連邦の勝利に比べれば、考慮するまでもない事ですよ」
笑って敬礼して、部屋を出た。

１５　ＲＸ―７７開発計画

次の新型ＭＳの草案をまとめる。
結構複雑な作業かと思われるが、実はそうでもない。
今回の新型の必須項目は二足歩行である。
そう、ガンキャノンだ。赤く塗ったのは、先の二足歩行テストで見えづらい色だったので、改善してもらった結果だ。あの色って、この程度の理由なのか？

「どういうことです？」
レイ大尉が、やってきてこちらの草案を指す。
ああ、やっぱり来たか。
「どういう事とは？」
「ＲＸ―７６を凍結して。その上でＲＸ―７７。どういうことですか」
突然の特大の仕様変更に意見を言いに来たのだろう。そりゃそうだ。
「余計な時間をかける余裕なんてないのですよ」
「わかっているさ」

「では！」
「だから、ＲＸ―７７は二足歩行のテスト機なんですよ」
「ＲＸ―７６は？」
「コアブロックシステムは？」
「……」
　そう、ＲＸ―７６は初期構想時のガンダムである。ガンダリウム合金の装甲に、ビーム兵器。ザクを超えるエネルギーゲインを持つスーパー機体だ。
　そして、それだけである。ＲＸ―７５で提案された教育型コンピューター搭載のコアファイターを使用した合体分離機能は当然盛り込まれていない。
　それは情報収集機能のない、ジオンＭＳの理論構想と同じ、ハードウェアとしてザクを超えるだけという機体だ。
「コアファイターの必要性と有用性は君も理解しているだろう？」
「……」
「それを、ガンダムに取り入れない理由はあるかね？」
「それがＲＸ―７６の廃案ですか？」
「それがＲＸ―７７だよ。二足歩行テスト機は名目にすぎない」
　思いっきり嘘であるが、科学者連中の弱みに付け込むための大義名分に丁度良かっ

た。

なんで、ＲＸ―７６にコアブロックがないと思う？　有用で、公式的にも採用しようと思っているのにだよ。

はっきり言うが、Ｖ作戦の先行きは不明瞭どころか失敗する確率の方が高かった。その最大の理由は、先にも述べたコスト無視のガンダム量産計画であるが、それとは別に致命的な問題があった。

開発チームの権限の肥大化である。

そうでなくても、各専門家の大御所をチームリーダーとして、解析から開発をさせた結果、その分野での開発は飛躍的に開発が進んでいるが、同時に彼らが他のチームと歩調を合わせる事はなかった。各開発チームがモビルスーツの開発という目的ではなく、自チームの優位性の確保に突き進んでいるのだ。

だから、彼らは後から来た〝画期的な〟変更を受け入れられない。自分の領分を奪われるからだ。

この行きつく先は簡単である。妥協しない調整と協議を繰り返した挙句、とんでもないものが出来上がる未来だ。

そうなる土壌は、そういうチーム分けをして、双方の意識合わせを十分に行えなかったか、連邦軍管理者（つまりオレ）の責任なんだが、そうせざるを得なかったわけだか

ら仕方ない。自重しなかった向こうも悪いといっておこう。
そんなわけで、オレは彼らの勘違いをわからせることにしたのだ。
つまり、管理者というものが、科学者の浪漫やポリシーを無視できる、上位者であるという事をだ。

「このＲＸ―７７は両肩に２８０ｍｍキャノン砲を二門搭載し、遠中距離に対応。近距離では、両手のマニピュレーターでマシンガンを装備します。武装に関しては、ザクの１２０㎜を代用しますが、そこは調整する事になるでしょう」
各リーダーと、連邦高官（コーウェン准将含む）を交えた、報告会でガンキャノンの基礎要項説明する。
「ビ、ビームライフルは!?」
ビーム兵器開発チームの例の大御所チームリーダーが、顔面蒼白で声を上げた。
まだ一カ月たっていないので、凍結準備中と言っても開発会議に参加する権利はある。
「搭載されません。両肩のキャノン砲を主武器とします。ザクを破壊して余りある能力を持っていますし。対艦能力に関しては、現在のザクの攻撃データを流用すれば確認できるでしょう。２８０㎜は予定で、現在調整中ですが２００㎜を超える口径が可能で

す。そして、その最低水準でも、ザクは十分撃破できます」
ちなみに、ザクの持つバズーカが２４０㎜である。それを超える口径はつまるところ、ザクの対艦攻撃を超えるというデータを、連邦は屈辱と共に知っている。その攻撃力に疑問視する阿呆は少なくともルウム戦役の記憶も新しい現在は存在しない。
そこまでする真意は、ビーム部門さん。お前の席はボッシュートアピールである。
事情を知っている他チームから同情的な視線がビーム部門に向けられる。
事前に、ガンキャノンのプロットは各部門に配布済みである。もちろんビームライフル未搭載についてもだ。そして、ビーム兵器部門の凍結は公表している。
その意味を察しのいい者なら気が付いているだろう。そうでないものも、この会議の様子を見れば空気を読むだろう。
案の定、ビーム兵器部門の両隣の椅子は、外されたように空席である。
「少佐。ビーム兵器搭載の予定だったと思うのだが」
政府高官から、疑問の声が上がったが、その質問は想定済みである。
「技術的な問題によりビーム兵器の搭載が難しくなったための代行案です。ビーム兵器の開発をやめるわけではありませんが、モビルスーツ開発に必須の搭載武器ではありません」
重要なのは技術的問題であると責任転嫁する事。そもそもビーム兵器自体が、それま

で艦艇にしかついていなかった兵器であり、今回初めて携帯用に小型化しようという新兵器なのだ。ジオンだって開発していない前人未到の試みである事を認識させれば「ああ、やっぱり駄目だったか」で済む話である。

連邦が求めているのは新兵器ビームライフルではなく、新兵器モビルスーツだ。

どちらを優先するかと言えば、決まっているだろう。

「両肩二門の大型砲の反動を二足歩行で吸収できるのか?」

「自重を増やすことで問題を解決します」

「その分遅くなるぞ!」

「ビーム兵器に回す分のエネルギーを機動力に回す事でカバーできます」

「近接ビーム兵器がなければ、白兵戦はどうする」

「そのために、携帯武器としてマシンガンを装備します。近接においても、体当たりで対応できます。重装甲による質量の増大で、ザク程度なら余裕で跳ね飛ばせます。なお、ルナチタニウム合金（ガンダリウム合金）を使用しているので、ザクのヒートホークで切り裂くのは難しいでしょう」

「対艦時の近接攻撃は?」

「両肩のキャノン砲があるので、戦艦に近接する必要がありません」

矢継ぎ早のビーム部門からの疑問にすかさず答える。レイ大尉とも協議の上での回

答だ。
もちろん完全とは言い難いが、一刻も早い自軍ＭＳを求める連邦軍には、一年後にできる完璧な機体ではなく、１か月後にできる有効な機体を求めている。
その証拠に、連邦高官からは何の質疑も来ない。
力なく椅子に座りこむ、ビーム開発部門のリーダーを横目に、会議室の全員に視線を向ける。
「以上です」
ガンキャノン開発計画が発動しました。

16　量産機の元となるもの

「では、お願いします」
「はい。早急に形にします」
会議室の一室で、一人の技術員と握手を交わす。
あの後、体調不良を理由にビーム部門のトップが辞任。チームの主要メンバーを呼んで、ビーム部門の人員削減と、計画の見直しを命じた。そして、1月以内に形にできるなら凍結解除と人員削除を撤回する旨を伝える。
意気消沈していたビーム部門は、目を血走らせながら開発を始める事になる。
ビーム部門の状況が効いたのか、モビルスーツ開発に当たっての摺合せは、きわめて良好に進んだ。今回の主となる二足歩行と姿勢制御。そこに、すでに蓄積していた機動射撃と、遠距離砲撃を盛り込む形だ。
ハードウェアに関する摺合せはレイ大尉にまかせ、ソフト面での調整に従事する。
そして、レイ大尉に丸投げした分で、新しいプロジェクトを立ち上げる。
「簡易モビルスーツ?」

コーウェン准将に提出した草案にはそうある。
「はい。Ｖ作戦におけるモビルスーツの構造を簡略化させ、いわば工兵のように後方支援をさせる機体です」
ようやく、本当の意味でのＶ作戦の下準備ができる。
信憑性を高めるために添付したサンプルとして、ザクタンクや、いまだ旧ザクを使っているジオン軍の運用方法を説明する。
ガンダム計画から、ジムを作るには、いくつかの問題がある。
ジムがガンダムの簡略版であるなら、当然ガンダムが開発されることが前提となる。
しかし、ガンダムができればガンダム量産しようとする。そうなれば、コスト問題が表に出る。
つまりゲームオーバーである。そうならないために、どうするか。
答えは一つ。代案を作成しておく必要があるのだ。
それが、ガンキャノン製造である。
二足歩行、姿勢制御、武器管制、機動戦闘。一応モビルスーツに必要なものは備えている。
両肩のキャノン砲と、それに伴う装甲の増加。そんなモン取っ払えばいい。
ほら、ジムを作る雛形ができた。

後は、ガンダム開発に伴い、新構造を流用すればいい。最新技術というのは基本的に複雑なもので、そういった構造はコストの面から量産機には適さない。

白兵戦用とか中距離支援用といった使い方ではなく、量産機のベースとなる性能とか基本構造という意味で、ガンダムとガンキャノンに差はほとんどない。そして、量産機であるために、その構造を簡略化させれば、その差はさらに小さくなる。

つまり、ガンダムからジムを作るのではなく、ガンキャノンからジムの元型を作り、そこにV作戦による各運用データでソフト面から補助をする。

ジオン軍のようにハードとそれ専用のソフトではなく、複数のハードに対応した汎用ソフトだからこそできる相互アップデート作業だ。

ソフトウェアの増減で質量が変化する事はない。事前に余裕のある性能を持たせれば、入れるソフトウェアを変えるだけで、ＭＳの性能を変える事ができる。

そもそも、モビルスーツは持つ武器によって用途を変える汎用性が特徴の一つだ。だからこその汎用機。そこで、ハードだけではなくソフトでも互換性を持たせて汎用性を高める。

ガンダムがない現段階の問題点は対ＭＳを想定した白兵戦データが全く手つかずの点だ。これは後のガンダムの固定武装にビームサーベルをつける事で、使用データを収集できる。その為にＲＸ―７８の名目を白兵戦用ＭＳにすれば、テスト項目的にも問題

はない。
これでようやく打開策が出来上がる。

17　死すべき運命の人達

【リストラ候補】
　違う違う。
【廉価ＭＳ製造開発要員割振り】
　うん。おためごかしだな。
　いくら基礎構造を流用するからとはいえ、ジムを作るための要員は必要だ。当然、その人材は、現在バリバリＭＳ開発をがんばっているモビルスーツ部門から引き抜く必要がある。
　廉価版とはいえＭＳを作るわけだから、それだけの能力が必要だ。
　しかし、だからといって各部門の主要メンバーを引き抜くわけにはいかない。ジムへの移行を気取られるわけにはいかないし、そもそも、現在開発中のＲＸシリーズが完成することが前提だ。引き抜いた結果ガンダムが開発できませんでしたでは、本末転倒である。
　となると……
「若手からの大抜擢という形で引きぬくしかないんだよな……」

まだ、実績のない若手要因に任せるという話だ。
オレの計画通りなら、将来Ｖ作戦がジムへと移行するに当たり、この責任者の立場は後任にとって代わる。その場合、影響力の小さい若手なら、栄転という形で量産機開発の管理者から外すことができる。プライドの出来上がった高齢層だとそれが難しい。新しいことに挑戦する意欲がなくなるとか、慣れ親しんだ今の状況から離れたくないとか……
その為に、用意した人材リストから、やたらと目立つ人名に目を向ける。
別にその人の名前が珍しいわけではない。
『ウッディー・マルデン中尉』
こいつか……
若手で実績はないけど管理能力のある士官。図ったかのように条件にあてはまる人材だ。
別に、この人に問題があるわけではない。
オレがためらっているのは、原作の話だ。この人は原作で婚約者を結婚前に失って、その上ジャブローに攻め込まれた際、ジオンの赤い彗星に、コクピットごと破壊されて殺されるのだ。
もしかして『大抜擢→将来に見通しが出る→プロポーズ→そして原作へ』の天国から

地獄ルートをオレが推したことになるのか？

……かなりヘビーな気持ちになるが、俺だって連邦士官だ。人に「死ね」という軍人だ。

それに、結婚前とはいえ、あの婚約者のマチルダさんといちゃいちゃできるボーナスステージがあるんだ。そう思って、現実から目をそらそう。

リア充爆発しろが実現するのも嫌な話だ。

「廉価版ですか……」

「あくまで、軍としての意向です。人材に関してはこちらで調整します。叩き台だけでいいので手伝ってほしいのです」

ジャブローの一室で、テム＝レイ大尉と協議をする。もちろん、このジムにはテム君はノータッチ。かかわらせることはない。君はガンダムにすべてを捧げてくれ。

ウッディーの話のせいか、この人の今後の事もいろいろ考えてしまうが、それを頭から追い出す。考えたところでどうしようもないのだ。オレは自分の事が精いっぱいなただの人間で神様ではない。

オレの葛藤をよそに、廉価版ＭＳの概案が出来上がる。

肩のキャノンは取り払われ、装甲も高価で重いルナチタニウム合金を排除。その分の

軽量化によりエンジン回りの見直し、関節部分の簡略化と手を加えていく。
「ここまで必要ですか?」
　オレがくわえていく修正事項に、レイ大尉が聞く。たしかに、項目を上げているだけだが、その数は結構な数になる。
「拡張性がありすぎるように見えるのですが」
「それが必要なんですよ。レイ大尉。これは、戦後も使えるモビルスーツです。ジオンとの戦争の後、地球連邦政府には地球圏の復興という使命があります。これは戦中そして何より戦後も使うモビルスーツになるんです」
「はあ……」
「大丈夫ですよ。レイ大尉にこれを作れなんて言いません」
　オレの言葉に納得するレイ大尉。
　まあ、新技術であるモビルスーツの一線級の技術者だ。量産用の廉価版に魅力を見出せないも仕方ない。悪いが、レイ大尉には最後までガンダムを作ってくれ。
　再び原作のテム＝レイ大尉の最後を思い出す。主人公アムロの初戦闘で宇宙に吸い出されて酸素欠乏所となり、そのまま中立コロニーに流れついて、ジャンク屋で働きながら、最後は階段を踏み外して……
　考えるなコウイチ＝カルナギ。お前はただの連邦士官で、原作知識を持っただけの人

間だ。自分の事しかできない人間だ。誰をも救える人間じゃない。
ルウム戦役で家族が死に、すでにこの戦争で同期の半数近くが死んでいる。だが、何をしろというんだ。
士官学校で最初に教わった事じゃないか。近代戦において、目に見えない相手を殺す以上に、身近にいる仲間に死ぬかもしれない命令をするのが士官なのだと。
仲間を助けるのが良き兵士。仲間を見殺しにできるのが良き士官。
「こんなものでいいしょう」
本当は、もう少し追加したい要素があるのだが、そこらへんは後で随時追加させるとしよう。現時点で廉価版ＭＳに不自然に力を入れると怪しまれる。
ついでに、今のおかしな方向に行く思考もリセットだ。
コウイチ＝カルナギは地球連邦軍士官だ。
それでいい。

１８　事後承諾

「これはどういう事だ!!」
ジャブローに無数にある部屋の一つに怒号が響く。
デスクの前にコーウェン准将。その前には、書類を持ったオレ。他にはいない。わざわざ人払いをしてもらっているからだ。
「見ての通りです。Ｖ作戦で想定される費用になります」
「……」
黒人系のコーウェン准将なので、顔色はわからないが、それでも汗だくだ。
そりゃそうだ。この予算の総額は、常識的に考えてもとんでもない額だ。非現実的な意味でである。
いくら連邦の命運を握る主力ＭＳといっても、現在保有する兵器や艦艇がある。それの維持費を考えて、さらそこにＭＳ費用を投入すれば、新規事業投入資金といったレベルじゃ済まないだろう。そうでなくとも、この戦争が始まる前から地球連邦政府の財政は悪化していたのだ。
「そして、こちらが代案になります」

「なに?」
「すでに進めている廉価版ＭＳ開発。そちらを量産機の主軸にします」
「馬鹿な！　そんなものをどうやって上に報告する!?」
まあ、さすがに今まで開発していたものを捨て去って、実は隠していた新兵器ですとは出せない。「こんなこともあろうかと」が許されたのは秘密基地にいる天才科学者だけだ。
組織である以上、上層部のＧＯサインもなく計画を進めたら、それは立派な独断専行。成果が上がろうとも、それは立派な命令違反だ。
「ですので、Ｖ作戦はあくまでＲＸ―７８の開発のまま進みます」
そもそも、Ｖ作戦は当初から高性能ＭＳガンダムの開発計画だった。それは間違いない。だが、現在そのＶ作戦には予期せぬ開発案件が組み込まれている。
・ガンタンク
・ガンキャノン
・コアファイター（コアブロックシステム）
・ホワイトベース（これはほとんどノータッチ）
・廉価版ＭＳジム
すでに、上層部の意向でＶ作戦は当初にはない複数の要素が組み込まれている。そこ

を取り込むことでＶ作戦の項目を追加変更させるのだ。
開発計画の目的は変わらない。ただガンダムの開発とガンダムの量産を別物にする。連邦初の高性能ＭＳガンダムを開発させることを主目的という事にして、量産機は別にする。
量産機へはガンダムの運用データをフィードバックすることで性能を効率化させるという名目を加えてＶ作戦に後つけで加える。
すでに、用意していたガンダムの量産用の機材を、ジムの量産用へ変更させるようにも指示を出している。なので、外見はガンダムに酷似した外見になるだろう。ガンキャノンではなく。プロットにあるガンダムだ。
「……君はこの事態を想定していたな」
オレの表情からそう読み取ったのか、コーウェン准将は押し殺した声で聞く。
「ハッ。閣下にお知らせる数か月前に、この事態を憂慮しておりました」
「なぜ、その時に報告しなかった！」
ダン!!
組んでいた腕を解いて机を叩く。机の上の書類ががたりと揺れる。
もちろん理由はある。言い訳だって用意している。準備が万端だからこそここにいるのだ。

「報告すれば、閣下は計画を凍結させるでしょう」
「……」
「そして、代行案の為に上層部に掛け合ったはずです。自分の進退を賭けて」
「……」
「そうなれば、閣下は終わりです。代行案が失敗すればそれまで。成功しようとも、この問題を指摘されて失脚されます。たとえその事態を閣下が覚悟していたとしても、避けられるなら避けるべきです。何のために、息をするのも大変な地球に降りてきたのですか」
今後、連邦軍の主力兵器がモビルスーツになる事は確定している以上、誰もがこの巨大利権に食い込もうと狙っている。アースノイドではないコーウェン准将がそれの統括をし、閑職にいた無名の一佐官のオレが、ＭＳ開発を管理していたのは、失敗したときの責任を取りたくない。ただの人身御供。それだけの理由だ。
ＭＳ開発が軌道に乗れば、連邦上層部はＭＳ開発の主導権を取り上げるだろう。それは確定事項だ。一将校、一佐官に任せられる内容ではない。
問題はその後だ。ウッディー中尉のように、成果を取り上げるという事は、その成果に見合った代価が支払われる。
利権、コネ、役職。当然、それは成功したという功績があってこそだ。周りに迷惑を

かけまくったけど、褒美もよこせは許されないのはいつの時代でも一緒だ。
そんな乗るか反るかの博打のような計画に、コーウェン准将は名乗りを上げた。
その理由は一つしかない。ジャブローでの月勢力の影響力拡大だ。
アースノイドとスペースノイドの間には確執がある。ましてや、今回の戦争はその二つの民族の争いと言って過言ではない。
その軋轢は、月勢力にも大きく関係する。ジャブローからすれば月もコロニーも同じスペースノイドだ。しかも、月都市グラナダは敵国のジオン側に回り、もうひとつのフォン＝ブラウンはよりにもよって中立を宣言してしまった。
連邦が勝利すれば、月勢力は連邦の味方ではなかったという事実だけが残る。
それを避けるために、ジャブローというアースノイドの巣窟に、月勢力の影響力を確立させる必要がある。そう考えれば、Ｖ作戦の総括なのに、その業務をオレに一任し、ジャブローで延々とコネつくりに奔走する意味も分かる。
Ｖ作戦が成功すれば、ＭＳ開発の利権を手に入れるためにジャブローは配慮する必要がある。月勢力の功績として、連邦軍の中に月勢力派閥を作ることができる。連邦軍主力兵器ＭＳ開発という利権を持った派閥だ。
失敗しても、コーウェン准将の首一つで済む。月勢力からすれば将校一人の犠牲で済む。そして、うまくいこうといかなかろうと、准将によって作られた月とのコネは残る。

まさに、ハイリスクハイリターン。

何を隠そう、コーウェン准将がそれを知っていて、覚悟してジャブローに来ているからどうしようもない。

己の身がどうなろうと、ジャブローに月とのパイプを残す。それが、連邦の味方ではないという現状の月が取れる唯一の方法だ。

正しく浪花節である。

……まあ、それに追従するオレの首に関しては考慮の外のようだけどな。

この頑固ゴリラめ。

「すでに、経理部に話は通してあります。ジャミトフ大佐に頭を下げるくらいで、この件は進むでしょう」

「……」

両手の拳をデスクの上で握りながら、片眉を上げてこちらをにらむ准将。その姿はほんとにゴリラだ。その拳でドラミングとかするなよ。絶対爆笑しちゃうから。

まあ、複雑な心境はよくわかる。明らかに自分では対応できない致命的問題を、部下が報告なしで動いて、勝手に対応したのだ。面目丸つぶれというか、浪花節丸つぶれだ。

怒りの表情から言葉ひとつない准将に、代行案を含んだ形のV作戦の企画書をさし出す。

それをすぐには受け取ろうとせず、准将はこちらをしばらくにらみ続ける。
「……すべて、対応できておるのだな」
「ええ、あとは准将が頭を下げるだけです」
Ｖ作戦は、高性能ＭＳガンダムを作る計画だ。だから、ガンタンクやガンキャノンを製造し、その集大成としてガンダムを作る。
そこに何ら変更はない。
そのデータを収集するために教育型コンピューターを搭載させ、高性能機ガンダムというフィルターを通して集約した情報を、量産機というモビルスーツにフィードバックする。
その為に、ガンキャノンというジムを作るためのベースを作った。ビームライフル部門を生贄に、科学者と連邦軍の力関係を確立させた。廉価版ＭＳのジムの開発のために各部門から人員を用意させた。
すべては。ガンダム開発という目的をそのままに、量産機開発という〝おまけ〟でＶ作戦を完成させるためだ。
コーウェン准将が無言で計画書を受け取る。特に言葉もなく読み始めるので、そのまま踵を返してオフィスの扉へ向かう。
扉を開けようとしたところで、後ろから低い声が聞こえた。

「迷惑をかけるな」

振り返って敬礼しながら答える。

「お気になさらずに。それが私の仕事です」

そして、笑って見せた。

１９　Ｖ作戦の完成

「Ｖ作戦は連邦モビルスーツの開発計画だったと聞いているのだが」
「もちろんです。現在ＲＸ―７８は開発段階です。順調とは言えませんが、スケジュール通りに進んでおります」
「この量産機は？」
「ＲＸシリーズは型番からわかるとおり試作機です。正式採用された機体ではなく試作機です。これが量産化されるわけではありません」
「Ｖ作戦はそもそも連邦軍の主力モビルスーツを作る計画だと思っていたのだが？」
「もちろんです。ＲＸ―７８はザクを超えるモビルスーツです。そして、この量産モビルスーツの性能もまたザクを超えています。その上で、ＲＸシリーズの運用データを組み込んで効率化したシステムにより性能使用率を上げることができます。もちろんコストの面でもです」
　茶番劇のような会議で、コーウェン准将すら差し置いて回答している一佐官はオレです。
　質問者はジャミトフ・ハイマン大佐。ああ、向こうも一佐官か。

会議には連邦軍上層部も出席している。そのうち何人かは、苦虫をかみつぶしたような顔だ。

まあ、わからなくもない。

現在ＲＸ―７７ガンキャノンが組み上げてテストしようとしている段階だ。そして、ガンキャノンのデータを使って作るのがＶ作戦の集大成ガンダムだ。

オレ達の失敗とかＶ作戦の主導権奪取をたくらむ者達からすれば、ＲＸ―７８を開発しているところで、問題を爆発させたかったのだろう。そうすれば、Ｖ作戦の集大成であるＲＸ―７８そのものを手に入れたうえで、ＭＳ開発計画を手に入れられる。

その前に、経理部がこの問題を提起したことで、彼らのもくろみは絶たれた。

正確には、こちらから量産化計画の予算請求を行ったことで、問題がすり替えられたともいえる。ガンダムを開発し、その生産費用を出してからの問題提起ではなく、ガンキャノンを開発して、その上での量産用ＭＳの予算請求だ。

案の定、他の部署からの質問はない。

当たり前である、ガンダムが開発されていない段階でＲＸ―７８についてケチがつけられるわけがない。

量産ＭＳについてもそうだ。圧倒的に情報がない。ジオンでいえば、旧ザクとヅダの量産ＭＳのコンペしている段階で、ザクタンクの情報を手に入れるくらい無理難題だ。

今回の会議の前に資料は提示している。ただ、コーウェン准将にすら土壇場まで秘密にしていた量産ＭＳ開発計画（旧廉価版ＭＳ開発）を察知できた者はいない。
この段階での量産ＭＳ開発計画は、彼らにすれば青天の霹靂だろう。
原作で量産ＭＳジムという存在を知っていたオレでなければ、この状況を作り出せないし、この状況に対応できない。
チート知識で笑いが止まらんという話だな。

「ご存知の通り、Ｖ作戦の概要は完成した形で始まったわけではありません。ましてや、本計画の予算計画が二次三次と段階的に確定している現状で、それに見合う成果を出しています。その成果が納得できないというならともかく、予算定義の段階で疑問視されるというのは、何か明確な理由があるのですか？」
オレの少し喧嘩腰になった言葉に、隣に座るコーウェン准将の肩がピクリと怒る。
同時に、言葉を向けられたジャミトフ大佐の片方の眉毛もピクリと持ちあがる。
う～ん、この狸と狐の名演技。オレは相変わらず掌の上の猿だわ。裏で話がついているのにこのリアクション。そんな小さな反応でも、周囲の緊張感が一段上がる。
だが、そこまでだ。
確かに、経理部は予算定義への質疑を行える立場だが、計画の精査は連邦上層部の仕

事だ。割り当てる金額の精査はしても、計画の是非を問う資格はない。そして、計画に非を告げるための材料は他の誰も持っていない。そもそものV作戦の集大成ガンダムの開発はまだ始まってすらいないのだ。

要するに、そこまで話はついているわけだ。どう見ても茶番である。

「…予算に関しては、検討ののち回答する」

しばしの沈黙の後、これで質問は終わりというかのようにジャミトフ大佐が座る。

これで質問する資格のある人間からの質疑は終了だ。

そして、V作戦の支持者であり、主流派筆頭のレビル将軍に逆らえる者がいない以上、この計画はこのまま上層部の承認という大義名分を手に入れる。

こうして、ガンダムが開発されるより早く、V作戦はジャブローの近く深くで完成した。

２０　ホワイトベース宇宙へ

ジャブロー宇宙ドック。
なにげに知られていない事だが、地球連邦軍において、宇宙戦艦はすべて地球産。
Ｍａｄｅ　Ｉｎ　Ｅａｒｔｈである。
ＭＳができるまで宇宙での戦力は戦艦が主力であり、当然、その製造工程は極秘中の極秘。
ジャブローの秘密ドックで作られ一隻一隻打ち上げていたのだ。
まあ、当然ともいえる。険悪な関係のスペースノイドの本拠地である宇宙で戦艦が生産可になれば反乱フラグである。まあ、そうでなくても反乱がおこったわけだからフラグ管理失敗だな。
たぶん、ジオンがモビルスーツという新兵器を主力兵器にしたのは、その辺も理由にあるのだろう。
「レイ大尉。ＲＸ―７８をお願いします」
「お任せください。少佐。必ず期待に応えて見せます」

そのドックの一角で、新造の巡洋艦ホワイトベースへ乗り込むテム・レイ大尉と握手をする。

思えば半年近くの付き合いだった。

問題なくＶ作戦は進み、すでにＲＸ―７８の開発も終了。大きな問題もなく、ジャブローでのテスト作業も終了し、残りは宇宙でのテストだ。

同時並行で進むこととなった量産ＭＳに関してだが、技術者チームからの反発はほとんどなかった。

まあ、量産ＭＳが変わった所で、ＲＸ―７８の開発に関して変更があるわけではないので、彼らの立ち位置が変わっていなかったというのも理由の一つだろう。

要するに、科学者として最新の技術で最高の期待を作る意欲はあふれまくっているが、コストパフォーマンスに優れた廉価安定性能の量産機の開発には興味がないという話だ。

世界最高の技術には興味あるけど、性能を落として安定性を求める廉価技術には興味ない話という事か。

消費者的には後者の方が圧倒的に重要なんだけどね。

まあ、科学者的には最新技術を開発することが、次の最新技術の開発にかかわるステータスになるわけで、そういう意味では、開発者と生産者の認識と価値観の違いとい

う事なのだろう。
そんな中で、唯一難色を示したのがテム・レイ大尉だった。
もっとも面と向かってはむかうわけではなく「最初から分かっていたんじゃないのか？」的な雰囲気を匂わせた程度だ。
彼としては、あくまでもＲＸ―７８でジオンを倒すという構図を想定していたらしい。コスト問題の理由を説明したら納得はしてくれた。
そういう意味でも、彼は技術者としての知識と、管理者の求めるニーズを認識できる貴重な人材なのかもしれない。
まあ、これが今生の別れなんだがね。
「ご家族はすでに宇宙に？」
「いえ、息子はすでに上がっているのですが妻は…」
「そうですか。では、息子さんのお世話は誰が？」
「お恥ずかしい話ですが、一緒に上がった近所の方にお願いしている始末で。」
「それは申し訳ない。われわれが大尉に無理させたからですね」
「いえ、少佐。それは違います。私はこの計画に参加できた事を後悔していません。むしろ誇れることだと思っています。妻と息子には、この戦争が終わったらたっぷりサービスしてやりますよ」

「ぜひ、そうしてください」

そういって敬礼をすると、レイ大尉も少しぎこちなく敬礼を返してホワイトベースに乗り込む。これで、オレの義理的な理由も終わった。

後は、せいぜい原作キャラを探してみるだけなんだが…

うん。さっぱりわからん。何せ巡洋艦だ。搭乗員の総数は数百名に話。後年の名艦長ブライトさんは、確か士官学校卒業直後の新米少尉だったはずだし、他の著名はホワイトベースクルーって誰だっけ?ジョブジョンとかいたよね?数少ないヒロインのセイラさんとかミライさんは民間人だし…

カツカツカツ…

連邦士官の制服を着た一団が前を通り過ぎる。その中心は壮年の佐官だ。

慌てて敬礼する。

むこうも、こちらに気が付くが、当然面識はない。取り巻き士官ともども、不審な目でこちらを見る。

階級は…中佐か。向こうも、こちらの階級を見て少し驚いたようだ。とはいえ、その目は厳しい。

その視線をうけて、心の中で舌打ちする。

ここにいる時点で、オレがホワイトベースの関係者ではなく、Ｖ作戦の関係者である官僚士官だとわかったのだろう。そして多分このおっさんはバリバリの現場主義者。生粋の前線指揮官なのだろう。

コーウェン准将に呼ばれる前に、ジャブローの窓際大尉をしていた時代も、こんな感じで白眼視されていたのを思い出す。

こんなところでも派閥争いか。こりゃ、レイ大尉向こうでも苦労するんじゃないかな。

頑固そうな艦長は、そのままホワイトベースへと入っていく。

もしかして、あれがホワイトベースの最初の艦長か。えっと、逃げろの艦長だったけ？

はからずも原作キャラに会えたけど、うれしくない…

21　昇進と進退

「おめでとう。カルナギ中佐」
　中佐の内示が出たらしい。
　入室するなりコーウェン准将は立ち上がり、歓迎するように俺の両肩に手を置くと嬉しそうにオレを揺さぶる。
「V作戦の功績が認められたという事だ」
　お～い。まだ、サイド7でのテストが丸々残っているんですよ。まあ、連邦軍的には一刻も早いMS開発が急務であり、すでに見切り発車的に量産機のジムの開発は始まっている（先行量産型）。
　V作戦はすでに稼働段階に入ったといえるわけだ。
「准将も昇進を?」
　オレの言葉に、抑えきれないようにコーウェン准将の両唇が持ち上がる。なぜだかわかっているが、頭に「黄色いバナナ」を連想した。
　改めて言うが、なぜだかはわかっている。
「私の場合は、年が明けてからになるだろうな」

自分の話だからか、すぐにその話は終わらせる。
当たり前だが、地球連邦軍は組織である。当然、昇進降格配置換えといった人事異動は、緊急でもない限り、決まった時期に行われる。
オレのようなペーペーの佐官なら、ある程度融通が利くのだが、さすがに将官クラスになれば、よほどのことがなければそういったことは起こらない。とはいえ、この段階まで来ると昇進が撤回される例はなく、前例がないことに腰が重い連邦軍組織において、昇進は確定したも同じだ。たとえ、戦闘中にコーウェン准将が戦死しても、昇進したうえで二階級特進といった形式となる。
まあ、連邦の固定化した風習なんてどうでもいいや。
今回のオレ達の昇進が、かねてより想定していた事態であるＶ作戦の担当終了を意味している。あたりまえだが「お前たちは成功したから配置換え」とは言えるわけもない。あくまでも、昇進して配置換えをするから、今の仕事は後任に譲りたまえという話だ。
正しく飴と鞭である。
「今後の我々の処置は？」
「安心したまえ」
オレの言葉にコーウェン准将が笑みを浮かべたまま答える。
「我々は、このままモビルスーツ開発の一翼を担うことになる。Ｖ作戦の作業もあるが、

その後はモビルスーツの運用に関しても手を貸すことになるだろう」

…

……

……えっ？

コーウェン准将の言葉を、改めて、噛み砕いて、よくよく吟味して、考えてみる。

確かに、連邦軍においてＭＳ開発は誰もやったことのない分野の仕事だ。成功したオレ達（正確にはオレ）のノウハウは当然必要になるだろう。

そういう意味では、直接作業していたオレがこのまま残るという話は、ありえない事ではない。コーウェン准将も、コネ作りしかしていなかったとはいえ責任者としての最低限の責任だけ（強調）は果たしていた。そのまま、その特権の一部をキープするメリットもわかる。

問題は…

「君には期待しているよ」

…このゴリラ。自分のコネ作り継続のためにジャブローに残る気だ。それも、オレがコーウェン准将の仕事の代行をするという、Ｖ作戦開始当初のと同じ流れで丸投げする気だ。

そりゃ、Ｖ作戦成功の功績だ。軍事力である地球連邦軍において、各前線指揮官が今

後の主力兵器であるモビルスーツの第一人者であるコーウェン准将と縁を持ちたいと思うのは当然の流れだ。ジオンのＭＳに対抗するための連邦軍ＭＳ。その配備の優先度、その運用方法。それは前線で命を賭ける指揮官ほど顕著だ。そして、現在の連邦軍主流派閥は〝主戦派〟だ。

そして、主戦派筆頭のレビル将軍の肝いりで始まったＶ作戦だ。コーウェン准将の手を離れ、連邦主導になるという事は、連邦軍の主流派閥から抜擢される可能性が高い。

改めて言うが、連邦軍主流派閥は〝主戦派〟だ。

コーウェン准将のコネつくりという目的からすれば、現在は入れ食い状態でうっしゃうっしゃという笑いが止まらん状況なのだろう。

つまるところ。

オ・レ・を・巻・き・込・む・な！

月勢力がジャブローとどんなコネを結ぶか知らないけど、オレと関係ないだろ!?

…あれ？

もしかして、オレって月勢力の一人と見られているのか？コーウェン准将の部下だし、地球派閥とコネなんてないし。

オレはもともとはジャブローの窓際士官の一人だもん。中枢ともいえる派閥にコネなんてあるわけがない。ついでに、今回の仕事内容も連邦軍人とは関係ない技術者相手

だから、ろくなコネにならない。

うん？

いやいやいやいやいや。待て待て。ちょっと待て。待って…

オレは地球生まれの地球育ち。一時基地に赴任はしたけど、月にいた時期なんて3年程度。一年戦争開戦を想定して、すぐにジャブローに戻れるように画策していたから、月にコネらしいコネなんてない。

オレ、月勢力なのに月とのコネがコーウェン准将しかない。

つまり、コーウェン准将を裏切れない。なにせ、連邦主流派とのつながりもコーウェン准将。後援者である月勢力とのつながりはコーウェン准将。

他にありそうなコネは、超リアリストの鬼の経理部黒幕のジャミトフ大佐。紅茶の大将に至っては、コーウェン准将の庇護のないオレなんて見向きもしないだろう。

オレは今後、連邦軍で頑張るにはコーウェン准将の忠臣としてやっていくしか道がない…だと!?

謀ったなゴリラ!!

２２　Ｖ作戦のその先に

さて、気が付いたらオレの連邦軍エリートコースが単線片道一方通行になっていたが、それはそれで仕事だ。

量産機ＲＧＭ―７９だが、こっちに関しては恐ろしいほど順調だ。

ウッディー大尉。マジ有能。

計画開始時からほとんど注目されず、きっちり組織体制作りから始めたせいで、他からの横やりがほとんど入らない。さらに科学者連中がＲＸ―７８が最終段階に入った事によりテンションを上げまくり、そのテストに意識を１２５％（当社比）向けている。

おかげで、量産機に格上げする事になっても「（テストをしていない）最新技術が～」とか「（自分の中では）革命的な技術が～」といった口を出してくることもない。

上も下も余計な事をしないせいで、極めてスムーズに量産体制の確立へと進んでいる。

となると、そろそろ次の問題を視野に入れて動く必要がある。

Ｖ作戦完了後の対応だ

現在、ガンダムの最終テストのために、各チームの開発者はそこにとどまっている。ＲＸ―７８のテストで問題が起これば即座に対応できるようにだ。だが、テストが終われば彼らに新しい仕事を割り振らなければならない。

ジオンに比べて、連邦のＭＳ研究は遅れている。ジオンと同じことしていては、その差を埋めることは難しい。

それ故に、連邦軍では複数の分野で同時並行で研究する。それが有効なのか無駄なのものなのかは、研究成果によって取捨選択する。

そうすることで、ジオンの技術に追いつく、あるいはジオンが気が付かない分野で特出することにつながる。

そんな多種多様に分かれたＭＳ研究に関して、オレの立場（というか仕事）も変わる。

今まで科学者たちは、各分野に分かれオレの管理下でＭＳ開発をおこなっていた。それはあくまでＲＸシリーズの為だ。

それが変わる。Ｖ作戦のようなゴールを見据えた開発ではなく、Ｖ作戦をスタートラインとして、チームに分かれて各分野で開発を行う。そして、その一部をコーウェン准将（を補佐するという名目でオレ）が管理する。そして、各管理者（これはオレではなくコーウェン准将）の上に総括する連邦上層部が置かれ、そこが正式採用等の判断をするわけだ。

Ｖ作戦というレビル将軍の主導による速度重視のＭＳ開発ではなく、ＭＳ同時並行開発という組織体制になったといえる。

…微妙につながってないぞ、この組織図。

オレの権限と手間が大きく減り、手続き等が面倒臭くなった半面、予算やトラブルなどの諸問題を上に丸投げできるようになるメリットがでる。これでジャミトフ大佐に直訴とか、ワイアット将軍の横やりや、他派閥からのダイレクトパワハラとも無縁になるわけだ。

純粋に、管理者として連邦組織に組み込まれオレの不安はほぼ解消される。

本当はＶ作戦の時もその辺の作業をコーウェン准将がするはずだったんだけどね…

そして、組織に組み込まれる以上、そこに組み込まれる人員の割り振りというのが発生する。どんな組織でも有能な人間を手に入れたいと思うわけで、その評価をするのは、当然彼らを管理していた人間というわけだ。

つまりオレだ。間違ってもコーウェン准将ではない。

一応、モビルスーツ開発において、各分野ごとにチーム分けをしていたから、その分野ごとに後任に割り振ればいい。

だが、そのままチームを移行させればいいという話でもない。

科学者の中には、軍人に尻を叩かれながらではなく、純粋な研究をしたいから戻りた

いとか言い出す者もいる。各分野の後任を狙う派閥からは、有能な人材はどれだといった内容をオブラートに包んで聞いてきたりもする。

まさに上と下の板挟みである。

さらにコーウェン准将が調子に乗って約束したった人事的調整なんかもこちらに回ってくる。

まるで奥さんに言い訳して休日に趣味に出かける恐妻家の旦那の様にこちらを伺いながら。

「後任者との円滑なコミュニケーションのために、彼らの顔も立てねばならないのだ。よろしく頼むよ」

知らねぇよ！

２３　ガンダム大地に立った後で～その１

緊急で呼び出され、向かった一室に集まっていたのは、レビル将軍と高官たちだ。
お、初エルラン将軍である。悪そうな顔してるな。
まあ、悪い顔しているから裏切るのか、裏切るために悪い顔になったのか、この世界の現実と原作の関係については深く考えないようにしよう。
各責任者がそろったところで、レビル将軍が口を開く。
「Ｖ作戦がジオンに察知された。サイド７が襲撃され、ホワイトベースがルナ２に助けを求めて逃げ込んでおる」
ああ、そうか。原作が始まったのか。
コーウェン准将のお供で会議に参加している。まあ、Ｖ作戦の進退にかかわる情報故に、准将以下オレも参加する流れになったのだ。
おそらくホワイトベースから送られたであろう、簡素な資料を見る。
テム・レイ大尉はＭＩＡ（生死不明）か…
『現在、ルナ２にＶ作戦を守りきるだけの戦力はありません…』
会議室のモニターにかかった大きなモニターでルナ２司令ワッケインが、通信で報告

している。

まあ、ワッケイン司令の話はもっともだ。ルナ２には現在連邦軍の宇宙戦力が駐留している。だが、そのほとんどが開戦当初の惨敗の残存戦力であり、本当にただ保有しているだけだ。

そして致命的なことに、連邦宇宙艦隊は開戦以降、ジオンのモビルスーツに対して有効な対応策を確立していなかった。宇宙戦においては開戦以来ジオンの独壇場。

当然、地球衛星軌道上においてもジオンの有利は揺るぐことなく、ジオンの勢力下であり、わずかな隙を見て打ち上げなどはできるが、宇宙艦隊の打ち上げなどできない状況である。

つまり、今の状況でジオンが攻め込んで来たら、勝つ術はなくルナ２の防衛力に頼ったところで、援軍を期待できない籠城戦と同じだ。

だから、オデッサなのか。

オデッサから逃げ出したＨＬＶの数は大量だ。それを回収したジオンの艦隊はその物資を運ばなければならなくなる。当然、衛星軌道のジオンの勢力は減る。

そこまで大量の物資を保有しているのは、資源確保を目的としたのだオデッサだ。オデッサを陥落させることで、ジオンの衛星軌道戦力を減らし、その間に連邦軍がジャブローから宇宙決戦用の艦隊を打ち上げる。

まあ、まだオデッサ作戦自体始まっていないんだけどね。

「宇宙艦隊がいながら機密の一つも守れんというのか!!」

「ジオンのモビルスーツに対する戦術ドクトリンがない。このまま無策で戦えばルウムの二の舞になるだけだぞ」

当然会議は踊る。

まあ、そうなるだろうな。現段階で選べる選択肢は二つ。

一つは、このままガンダムをルナ２にかくまい続ける事だ。

だが、これはリスクが大きい。現在ルナ２はジオン宇宙軍に見逃されている状況だ。ＭＳの登場により既存概念による戦力比は形骸となっている。３対１で惨敗した開戦当初からルウムまでの戦いを見れば、既存の残存戦力しか揃えていない連邦軍が、宇宙で勝つ方法がない。

そんな状況で、連邦軍モビルスーツという見逃せない新兵器がルナ２にあるとわかれば、ジオンが侵攻してくる可能性は十分にある。

そして、それに対する対抗手段が連邦宇宙軍には存在しない。

「ジオンが来る前に、ホワイトベースをジャブローに送ってはどうか?ジオンの目をルナ２からそらす事ができる」

「危険すぎる。赤い彗星がいるのだぞ」
では、ホワイトベースをジャブローに向かわせるか？
それも問題がある。先にも述べたように、地球衛星軌道上はジオンの勢力下だ。ルナ2から艦隊で護衛させればジオンに察知され、衛星軌道上でのルウムの悪夢再びである。
かといって、速度を重視しわずかな護衛で行けば、ホワイトベースごとジオンに破壊される可能性もある。なにせ、ジオンの赤い彗星という『戦艦五隻を凌駕する』戦力がホワイトベースに目を付けているのだ。
ホワイトベースとガンダムが撃破されたら、今までの苦労が無に帰す。
サイド7から避難する際に、コロニー内のＲＸシリーズの部品は焼却処分している。残っているのはホワイトベースの中にあるだけだ。
赤い彗星が執拗に狙うのは当然ともいえるだろう。
まあ、原作知識もちのオレからすれば、大気圏で燃え尽きるザクのパイロットって何て名前だったかな？程度の話である。
とりあえず、原作後押しの為に、コ―ウェン准将の腕を軽くたたく。
コーウェン准将が目をこちらに向けるので、アイコンタクトで小さくうなずく。
「レビル将軍。よろしいですか？」

「おお、コーウェン准将。何かあるかな？」
「はい。いささか…」
　コーウェン准将にふられて席を立つ。
「Ｖ作戦からお願いがございます」

２４　ガンダム大地に立った後で～その２

「まず、早急にサイド７に残されたＶ作戦の回収をお願いします」
「サイド７に残っているテスト機は破壊されているはずだが？」
「実機ではなくテストデータの回収です。ジオンの赤い彗星がホワイトベースを追ったというのなら、サイド７にまだデータが残っているはずです。それがあればＶ作戦は進みます」
　それが君の限界だ赤い彗星。
　本当にＶ作戦を追うのなら「Ｖ作戦が何か」を調べるべきだった。
　だが、それをしなかった。優れた指揮官で、優れたパイロットであるが故に、目の前にある実機に固執してしまった。
　試作機ＲＸシリーズはテストデータ収集機体である。すでにガンダムは、ほとんどのテストを完了している。そのデータだけでも量産機ジムのアップデートは可能だ。それには、最初から完成したデータを入れる必要はない。追加分を後から更新していくだけだ。
　ジオンのＭＳとは構想が違う。ザクはザク用のハードとソフト。グフはグフ用の

ハードとソフト。それは、ザクには最適だろう。グフには最適だろう。だが、それに対応したパイロットはザクの操縦熟練者。グフの操縦熟練者だ。だから、専用機といった自分用にカスタマイズされる。

汎用ソフトという概念ではない。

…ああ、そういう意味でジオンの「統合整備計画」があるのか。

チラリと、レビル将軍の横に座るエルラン中将を見る。

彼が裏でつながっているのがジオンのマ・クベ大佐。そして、統合整備計画の発案実施者もまた同じ人物。

パクリか、この壺チン野郎（卑猥な意味ではありません）。

とはいえ、そこに気が付いたのがマ・クベ。そこに思いが回らないのがシャア。

その差か。

「ＲＸシリーズは必要ないと？」

「いいえ。ただ、Ｖ作戦においてＲＸシリーズ自体は、すでに必須の物ではありません。ただし、ＲＸシリーズのデータは量産ＭＳの性能効率を上げる意味を持ちます。言い換えれば、テストデータを収集できないＲＸシリーズには意味がありません」

主力ＭＳジムへのデータ更新は、ぶっちゃけるとガンダムである必要がない。もちろん、高性能なガンダムからの反映は、性能を上げる最良の情報である。だが、今後生産

される量産機のデータを集計統合すれば、代用することはできる。
Ｖ作戦によるデータ更新は、ジムの初期段階をどこまで押し上げるかという話であり、一定の初期データでも、順次アップデートしていくことで、そのクオリティに持っていくことは、不可能ではない。
オレの言葉に、レビル将軍の眉毛がピクリと上がり、その下から鋭い眼光がオレを向く。
「しかし、ジオンがホワイトベースを見逃すわけがない。あれがジオンの手に渡ってもよいと?」
おおう、さすが派閥の長。最悪の場合の責任をこっちに向けてきやがった。とはいえ、こっちは佐官。責任をとるという意味では圧倒的に首の重さが足らない。おそらくコーウェン准将まで飛び火するという意味だろう。
「渡ったところで問題はありません。ＲＸシリーズはデータ収集用のテスト機です」
だが、残念なことにそれは杞憂というものだ。
笑みを浮かべてレビル将軍に答える。
うん?コーウェン准将の意志?紅茶の大将に無理難題言われた時のゴリラのように華麗にスルーだ。
そもそもＲＸシリーズは連邦ですら量産を見送ったハイコスト機体である。

ジオンが仮に奪取したとしても、ガンダムの量産は絵空事。ガンダムの技術を転用するにしても、ジオンのＭＳ開発構想から、技術転用したＭＳを一から作る必要がある。

連邦量産ＭＳにアップデートするデータだが、そもそもその存在理由をジオンが知らない。仮に知ったとしても、それを入れるソフトがジオンには存在しない。ザク用のソフト。グフ用のソフトだ。ジム用のソフトを作り、その上でジム用のハードを作るしかジオンには方法がない。

正直な話、ガンダムが奪われるよりもＶ作戦完了時のジムを盗まれる方が問題だ。ただ、その時はジムの量産化体制が完了したことになるので、Ｖ作戦を秘匿する必要すらなくなるわけだ。

ＲＧＭ―７９ジムが量産した後のガンダムの扱いを見れば分かるだろう。新技術や新装備のテスト機以外の使い道がない。もともと、その程度の機体なのだ。それがあそこまで活躍したのは、パイロットのアムロ・レイの異常性に過ぎない。

「ジオンが見逃さないなら好都合です。実戦テストに事欠きません。必要な支援を送ると同時に、データを持ち帰ればＶ作戦の精度は増し、本来の目的を果たせます」

「馬鹿な！危険すぎる」

「では、赤い彗星が援軍をルナ２に呼び寄せるまで待ちますか？今なら、赤い彗星だけに対処すればよいのです。それが危険であることは知っています。しかし、同時にしのぎ

切ることは不可能ではない。それは、サイド7からルナ2まで撃破されずにたどり着いたことが証明しています」

兵器はそろえてうれしいコレクションじゃないという話だ。

…しかし、こうやって見ると俺ってホントにひどい奴だな。主人公の生命の危険を無視して「お前の命よりテストの方が重要だ」と言って無理難題を言うＤＱＮ科学者まんまである。

まあ、危険な事をさせている自覚はあるさ。

２５　ルナ２準備

残念ながら、オレの階級は中佐である。
ましてや、会議にあってはコーウェン准将のお供で、当事者ではない。当然、会議の結果という軍事機密を教えてもらう事はなかった。
一応、コーウェン准将経由でＶ作戦の体制継続を告げられている。つまりは原作通りになったという事なのだろう。
そんなわけで、悩みといえば大気圏で燃え尽きたザクのパイロットの名前が、いまだに出てこないことくらいである。
本当にどうでもいい話だ。

「…では、確かに受け取りました」
『こちらでも、担当者に渡しておきます』
会議から４日後。ルナ２との通信回線で、ワッケイン司令とやり取りをする。
あの後、ホワイトベースの出発を囮にして秘密裏にサイド７からデータの回収をしてもらい、ＲＸシリーズのテストデータを送ってもらったのだ。

そのデータも厳重に暗号化したうえ、公共回線ではなく秘密回線。それもダミーを含めて５つに情報を分割している。うち３つ合わせて初めて情報を開示できるという念の入用だ。

まあ、現段階でＶ作戦が重用機密扱いであるための、当然の措置といえる。

もちろんそれだけではない。

「技師たちに関してはすでに？」

『ああ、すでに今ある分の情報で、生産を始めている。今回の分ですべてそろうだろう』

ルナ２での量産ＭＳジムのテスト生産が始まったのだ。いままでは、地上優先で開発していたが、今回の件で宇宙用の最終調整された開発情報を送っている。

もちろんジオンに傍受される可能性もあるが、現段階ではジオンは連邦ＭＳをガンダムだと誤解している。外部パーツがガンダムに酷似しているジムの情報なら、一部がばれてもガンダム用の物だと誤解するだろう。

すでに、宇宙開発用の技師はホワイトベースに先立って打ち上げられており、ルナ２で生産ラインの作成に従事している。

そもそも、宇宙での連邦軍拠点がルナ２しか残されていないことで、量産ＭＳの生産工場を急ピッチで準備してもらっていたのだ。

それもほぼ完成し、今回の情報で最終調整もできるだろう。

正直、Ｖ作戦がポシャっていたら、ここが一番経済的打撃を受けていたと思われる。
よかったねワッケイン司令。
元々ルナ２は軍事基地である。あくまで防衛施設であり宇宙での中継拠点だ。
当たり前だが生産工場ではない。普通は軍事基地で生産はしない。防衛施設には防衛施設に必要な設備があるし、生産工場には生産工場に必要な設備がある。そして、空間は有限だ。防衛規模が上がれば上がるほど、生産設備が増えれば増えるほど、その問題は増え続け永遠に解決しない。
そういう意味でルナ２での生産施設増設は、本当に連邦宇宙軍の苦肉の策という事だろう。
「データ解析については、逐次送信してください」
『了解した』
宇宙用の量産機の実働データを手に入れれば、それをガンダムのテストデータとすり合わせる事で、教育型コンピューターによるパイロットを補助したシステムの基本部分が出来上がる。
後は順次アップデート。ジムの台数が増えたところでデータコピーだけなら、更新の手間は最小限だ。
機体はすでに生産ラインに乗せて、生産・配備後に順次アップデート。

ジオン脅威のメカニズムに対抗して、こっちは連邦脅威のシステマニズムだ。

まさしく「（構想が）ザクとは違うのだよ！ザクとは!!」という奴だ。

『ホワイトベースが地球に向かったことで、ルナ２への監視の目も緩んだ。その隙に、我々は準備を整える事ができる…』

「ワッケイン司令？」

『しかしその為に、あんな少年少女を囮としなければならないとは、寒い時代とは思わんかね？』

「…」

某有名なセリフを吐く。

あいにく返答に困ったが、向こうも返礼などを求めていなかったようだ。そのまま敬礼すると通信は切れる。

寒い時代か。ガンダムオタクとしては、熱い時代といえるだろう。

当事者でありながら、当事者ではない俺からすれば、どっちの時代といえるだろうか。

２６　ニュータイプの価値

「カルナギ中佐。これが各機体からのデータです」
「ありがとうございます。マチルダ中尉」
差し出されるデータの記録装置。結構ゴツイ。
ホワイトベース隊からのガンダムの稼働データを回収した物だ。
一緒に渡された一覧を見る。
・宇宙空間での敵のＭＳとの交戦記録
・対ＭＳの白兵戦記録
・ビームライフルの射撃記録
・大気圏突入記録
・地上での戦闘記録
・機動行動による各エネルギーの減少情報
・各種機器の破損状況
げんなり…
これを改めてデータごとに再分配して、各部署に送り、解析した情報を統合して量産

ＭＳのソフトウェアにアップデート。
で、アップデートした情報をデータ化して配布。
昇進した段階で、全部放り出して逃げ出していればよかった。
もちろん、この後もお仕事です。
マチルダ中尉を伴って、エレカーに乗りこむ。
この後、マチルダ中尉は各種物資を補充して、再びホワイトベース隊の補給に向かう手はずだ。前回は想定外であった避難民の生活必需品などが主であったが、今回回収してもらったデータにより、ガンダム及びホワイトベースに必要な修理資材がわかった。
そして、それを用意するためには、その物資をどこが管理しているかなどを知る人間が必要となる。
つまり、ＲＸシリーズを作る上で、各チーム分けを行い、それを統合管理し、さらに彼らに影響力を持つ人間。つまりオレだ。
まあ、オレは手はずを整えるのがお仕事で、実際のデータを解析したりはしないけどね。
ああ、そうか。マチルダ中尉へのこの作業も立派に「手はずを整えるお仕事」の内か。
各資材の管理部門へ移動するエレカ―の中で、暇つぶしに話しかけてみる。
考えてみれば、彼女も立派な原作キャラである。

「ホワイトベース隊の様子はどうですか？」
「…さすがに、疲れているようです。必死さで何とか保ってはいますが、危うさが目立ちます」
　マチルダ中尉の表情は暗い。まあ、彼女も軍人である異常、避難民の民間人を支援するだけしかできないという状況が好ましいとは間違っても思わないだろう。
「マチルダ中尉は…」
「はい？」
「ニュータイプという言葉をご存知ですか？」
「ニュータイプ？」
「ジオンで研究されている兵器を扱う才能を持つ者のことだそうです。普通ではできないようなことを、事も無げにできてしまう才能の持ち主だそうです」
「アム…いえ。ガンダムのパイロットがそれだと？」
「いいえ。私も言葉を知っているだけで、何か定義があるわけではありません」
　突然の話題に、面食らうマチルダ中尉に話を続ける。
「しかし、ジオンの後を追う我々からすれば、ジオンが研究している秘密技術は無視できない。ましてや、その対象が連邦軍にあるとしたら、連邦内部での彼らへの印象は変わってくるとは思いませんか？」

つまりそういう事だ。ホワイトベースへの支援を全面的にバックアップする。そのメリットを才女の彼女ならわかるだろう。「彼らを見捨てる」という最悪の事態を回避する為には、できる限りの手段を講じる必要がある。

例えば、彼らを「ジオンの研究するニュータイプ部隊」という事にして、新技術のテストとして、新兵器の運用テストといった特殊な研究のためと大義名分を得れば、補給部隊として手を差し伸べる事ができる。

彼らを見捨てた挙句、新兵器「ニュータイプ」の実戦投入が後手に回れば、彼らを見捨てた者達には大きな失点となる。開戦当初のモビルスーツのように。

そのリスクに見合うデメリットがホワイトベースにないという事実が、彼らを見捨てない最後の理由になる。

そのメリットを彼女が理解すれば、後は彼女が勝手に動いてくれる。

そして、それは原作準拠を旨とするおれの目的と合致する。

「なぜ、そこまで?」

面識のなかったオレの言葉に疑問を持った彼女に笑って答える。

「RXシリーズの開発管理官は私でした。量産機へのガンダムのデータアップデートが今の私の仕事。そして、一緒に仕事をしたテム・レイ大尉のご子息がホワイトベースでガンダムを動かしている。私が手を貸さない理由の方がないでしょう」

オレの回答に、彼女は何か納得するように小さく笑う。
オレにはその笑みがとてもはかなく感じた。

２７　舞台裏の目

今日は機動性のデータ解析とアップデート。明日は白兵戦のデータ解析＆アップデートを流れ作業のようにしながら、再集計して情報をマージ。

２週間。シャワーのみで、睡眠は交代制。三食サンドイッチとバーガーの生活だった。

そんな、研究者一同の努力と不衛生の結晶であるジムのベースが完成。

もちろん、それで終わりじゃない。ガンダムのデータでアップデートも順次行っていく。だが、それはあくまでソフト面でのバージョンアップの話。

稼働する事で摩耗しやすい個所や、破損しやすい個所を、より交換整備しやすく、より摩耗を少なくするといったハード面での改修および生産ラインの変更が、これで一段落するという事だ。

よほど致命的な問題でない限り、今後そこに手が入ることはない。

そういう意味で、連邦量産モビルスーツＲＧＭ―７９ジムが完成したと言えるだろう。

一応、このソフトで稼働テストしてもらって、まだ改良することになる。

そして、それは地上のみならず宇宙でも言える。

『半月だ』
「は？」
『ホワイトベースを送り出して、わずか半月でここまで整った。今があの時なら、あのようなまねはさせなかったものを…』
悔しそうに言うワッケイン司令に首を横に振る。
「あの時送り出したホワイトベース隊によって、我々はここまで状況を整える事が出来たのです。我々はただ、彼らの努力の上にあることに感謝するだけですよ」
『…我々は軍人だ。民間人を守る軍人だ。それが民間人の、それも子供の命を賭けた努力に感謝をささげるなど、あべこべだとはおもわないか？』
「ええ、本当に寒い時代ですよ」
『っ！…フフ、そうだな』
暗くなる話題に、肩をすくめて返事をする。自分のセリフをとった言葉に、諦めたように首を振って自嘲気味に笑うが、その表情は少し和らいだ。
『ならせめて、彼らの努力を一つたりとも無駄にしないように努力するのが軍人の、いや我々大人の矜持というものだ』

「ええ、こちらも順次データを送信します。そちらでも何かあるようでしたら、そちらの研究員に伝えてください」

『了解した』

自嘲気味ではあったが、その発言に自信が現れていた。

それも当然だ。開戦当初からルナ2にこもり続けてきた彼らからすれば、ついに手に入れたジオンのモビルスーツに対抗する手段だ。

地上と違い、それ以外に方法がなかった。それ故に、どれだけ挑発しようとも耐えるしかなかった。いつジオンに攻め込まれるかという、恐怖に黙って耐えるしかなかった。

しかし、雌伏の時を経て、念願のモビルスーツを手に入れたのだ。

ジオンのモビルスーツに対抗する手段を…

と、敬礼したワッケイン司令の画像がぶれる。

〝ゾクッ！〟

背中に悪寒が走る。血の気が一気に引く。

それは、画像の乱れでのせいではない。

心に浮かんだ一つの懸念。

そんなオレの心情とは裏腹に、乱れた画面は、別の映像を映し出す。

白と黄色の花に囲まれた巨大なパネル。そこに掲げられる紫色の髪の若者。
その前に置かれた演説台に、一人の男の姿があった。
『我々は、今、一人の英雄を失った…』
ガンダムファンなら見逃せないイベントシーン。
だが、オレはそれを無視すると、通信室から出て速足で歩きだす。
ジャブローの施設内を急いで歩くオレを不審がる者はいない、ジオンの公開放送を聞くために、自分と同じように、近くの通信装置に向かう者がいるからだ。
だが、それはそういった同僚たちを無視して自分のオフィスに向かう。
オフィスでは、備え付けの小さなモニターで流れるジオンの国葬放送を見ていたマリドリット伍長がいたが、今後の予定をすべてキャンセルするように告げて、返事も聞かずに自分の部屋に入る。
そして、オフィスで自分の端末を操る。
Ｖ作戦開始時に、こちらに回された既存技術の開発情報。Ｖ作戦の実戦データ。
それに伴う各種開発の進行状況。
ドアの向こうから秘書室の通信から漏れる放送を無視して、情報を取捨選択し、一つ一つ必要な情報を並べていく。
『諸君らの愛してくれたガルマ・ザビは死んだ。なぜだ！』

そして、一つの懸念が生まれた。

もし、もしこの通りなら…

「連邦が、負ける…」

２８　敗北

モビルスーツが強い。モビルスーツに対抗するにはモビルスーツを使わなければならないほどに。わずか一機で５隻の戦艦を沈められるほどに強い。

だが、モビルスーツは完成された兵器ではない。それは性能の話だけじゃない。運用方法からして試行錯誤の途上にある不完全な兵器だ。

だが、モビルスーツでは、そもそも宇宙拠点を占領することができないのだ。

当然だ。モビルスーツは人型であっても、その用途は戦闘機や戦車に近い。

モビルスーツは敵を撃破する能力があるだけの兵器だ。

ルナ２は見逃されていたのではない。モビルスーツを主力とするジオン軍にはそもそも攻略する能力がなかったのだ。

戦争は破壊だけではない。いや、破壊はあくまでも目的に至る一つのファクターに過ぎない。

敵地を占領するという目的のための、一過程にすぎないのだ。

ボタン一つで雨あられとミサイルを降り注げたとしても、最後はその場所を占領する必要がある。そこに必要なのはモビルスーツではない。

一年戦争開戦時。ジオンは各コロニーを制圧したが、占領しなかった。破壊し、地球に落とし、地球連邦軍と戦闘しただけだ。

ジオンが初めて領土を増やしたのは第一次降下作戦のオデッサ。地上だ。既存の兵器で対応できる地上だ。

昔俺がプレイしたことのある、ガンダムのシミュレーションゲームで、オデッサ占領時にシーマ・ガラハウが出て来たシーンがあった、それは彼らが海兵隊であり、揚陸する歩兵だからだ。

地上ならそれでいい。輸送トラックなり航空機で送る事もできる。

だがそれが宇宙なら?

当然、宇宙艦艇に乗せた歩兵戦力を敵基地に送りこむ必要がある。

だが、もしその段階で、占領できるだけの人員を送りこむ船がなかったら。

敵味方がモビルスーツを投入することで、モビルスーツは敵モビルスーツと戦う事になる。

モビルスーツはモビルスーツと戦う。

そして戦艦は戦艦と戦う。つまり艦隊戦だ。

艦隊戦で敗北すれば、そもそもモビルスーツ戦に意味がない。補給できないＭＳがどれだけいようと、脅威とならない。

そして、ジオンのドロス級空母。
この怪物戦艦が、連邦戦艦のすべて圧倒する。
空母という名目と、これが収容できるＭＳの数は脅威だ。それ故に、連邦軍は圧倒的な砲撃能力と射程距離を見逃している。
事実、連邦軍はこの性能で勝る敵新型戦闘艦艇の対抗措置を取っていない。
当然だ。戦艦はＭＳを肉薄させれば勝てるという、連邦惨敗の、そしてジオン必勝の戦術ロジックがあるのだ。連邦軍も同じように、この怪物空母にＭＳをぶつけようとするだろう。
宇宙艦隊の対艦能力で対抗しようとしていない。
そして、連邦ＭＳとジオンＭＳの戦闘の外で艦隊砲撃によって決定的な性能差が発揮される。
そうさせることが目的なのだ。ＭＳを大量に運用させる能力を持たせることで、それが主体だと誤解させる。大量に運用できる対ＭＳ能力である自軍モビルスーツの運用能力と、主力戦艦を圧倒する対艦能力から目をそらせる。
その為に、ジオンがあえて連邦軍にＭＳを開発させる時間を与えたのだとしたら。
開戦時モビルスーツによって、連邦は多くの戦艦を失った。
だから、連邦軍はモビルスーツを開発する必要があった。

ＭＳが強力な兵器であり、対抗する必要があると印象つけ、そして開発させる。
Ｒｘ―７５ガンタンクに対抗してＭＳ―０７グフを作ったのと同じだ。それよりももっと壮大で、緻密で、狡猾だ。
新兵器の開発という一大プロジェクトを行えば、連邦軍といえど無理が生じる。その無理はどこに出るのか。今までオレが携わっていた事だ。分かりきっている。
既存兵器部門だ。
現代保有する地上戦力。そして、宇宙艦隊。
事実、これらの派閥は影響力を失い。宇宙艦隊に至っては新造艦ペガサス級をわずか数隻。他は、宇宙艦隊再建の為の既存鑑の製造と『ビンソン計画』によるＭＳ搭載能力を付随させた運用改修だけだ。
すべては真の目的のために。
会戦当初。ブリティッシュ作戦が失敗し、ルウム戦役を経て、南極条約以降の継続する戦争に対し、ジオンはコロニー落としを強行する戦力を失った。
では、どうするか？
地球に侵略し領土を広げる？
違う。そうじゃない。少ないジオンの国力でそんなことをしても無意味なことは誰だってわかっている。

最初から最後まで物量で劣るジオンが勝利する方法は決まっていたのだ。
コロニー落とし。
ブリティッシュ作戦はなぜ失敗した？
ルウム戦役でジオンのコロニー落としが成功しなかったのはなぜだ？
連邦軍の宇宙艦隊が必死の抵抗をしたからだ。
その最大の障害である、連邦宇宙艦隊を壊滅させる。
しかし、それを強行できる戦力を失ったジオンにとって、それは容易な事ではない。モビルスーツの威力をまざまざと見せつけられた連邦軍は慎重になるだろう。臆病といってもいい。ルナ２に籠城し、宇宙艦隊を前面に出したりはしない。
そして、ルナ２を攻略し、宇宙艦隊を壊滅させる能力が、現時点のモビルスーツにない以上、何とかして宇宙艦隊を引っ張り出す必要がある。
その為の、地上降下作戦。
その為の連邦軍ＭＳ開発。
地球を取り戻すために連邦軍がＭＳを開発させる。連邦軍は体制が整えば、その巨大な物量でジオンを圧倒する。
そして、地上のジオン軍が連邦の反抗作戦に敗れる。ジオンの地上戦力が低下し、連邦軍が宇宙で決着を付けようとするだろう。

ここまでしてようやく連邦宇宙艦隊は出てくる。逆に、ここまでしないと宇宙艦隊はルナ2から出てこない。

ルナ2は要塞であり、宇宙戦艦建造ドックではない。MS開発に回したために、ルナ2に戦艦を作る余裕はない。ジャブローから打ち上げなければ、宇宙艦隊が補充されない。

そして、宇宙決戦で早期に決着させるなら、ジャブローから打ち上げる戦艦だけでは足りない。

宇宙にある残存艦隊をかき集める必要がある。

そして、それをコロニーレーザーで焼く。

後に残った艦艇を、艦隊性能で勝るドロスが叩く。

そして、再びコロニー落とし。

それを止める宇宙艦隊はもういない。

地球それ自身を守るすべがなければ、地球連邦政府に選択肢はない。

そもそも、ジオンの目的は地上の支配ではない。

地上からの打ち上げは、衛星軌道から簡単に止められる。MSにはMSでしか対抗できない。だが、宇宙艦艇のない連邦軍にはそのMSを運ぶ方法がない。目的の衛星軌道まで援護する艦隊が存在しない。

コロニー落としの第一目的はジャブロー宇宙船ドック。
その一手で、連邦軍は宇宙艦隊再建の手段すら失う。
なんてこった。オレがこの仕事を始めた瞬間に、その成否を問わず、すでに敗北しているのだ。
レビル将軍がモビルスーツの性能をまざまざと見せつけられたことすら、何ら問題にはならない。
そして、その陰謀を巡らせたのはＩＱ２４０の天才。
ギレン・ザビ。
連邦はその智謀に敗北するのだ。

29　殺意

ああ、くそっ！

原作知識で持っている情報が、どんどんとピースにはまっていく。

ビグザムがあそこまで高出力なのはそういう事か。当たり前だ。対艦隊用の化け物機体だからだ。戦艦の主砲をIフィールドで無効化。メガビーム砲は連邦戦艦を一撃で葬れる。

アムロ・レイ曰く「圧倒的ではないか」だ。本当に圧倒的だよ。

ソロモンで連邦艦隊を少しでも叩く為なら納得だ。ドムの十機よりも華々しい戦果を上げている。

「戦争は数だよ」は正しいよドズル。だが、その数える相手が違うんだ。

ジャブロー侵攻が成功する確率が低くても強行したのは、ホワイトベース隊を追って、マッドアングラー隊が見つけたのが「宇宙船用ドック」。当然、あの戦いでジオンはその詳細な位置情報を入手している。

アプサラスもそうか。狙うのがジャブロー中枢ではなく宇宙船ドックか、打ち上げられた宇宙艦隊の数を減らすために使われるなら。ああ、ゼーゴックもそうか。

原作知識のキシリア主導のものを排除して、情報をギレン・ザビに絞り込むだけで、どんどんと目的が明確化されていく。

連邦も完全に掌の上だ。

ルウム戦役であれだけＭＳの脅威を見せつけられれば、その存在を無視できない。連邦ＭＳの開発に力を注ぐ。そのうえで、連邦艦隊を再建する物量はない。開戦前にそこを見極めればいい。戦争前から落ち目だった地球経済から、その概算は容易だ。後は、残った備蓄をＭＳ開発に浪費させればいい。地上の半分を失った連邦はその備蓄を使うしかない。

その為の地球降下作戦。

地球連邦政府の地球連邦軍だ。連邦政府は自分たちの支配基盤である地上の奪還を第一優先とする。だから、地上での反攻作戦は欧州（オデッサ）、北米、アフリカ大陸の順なんだ。地球連邦政府内の勢力順そのままじゃないか。

そして、地上でジオンＭＳを駆逐するには、宇宙艦隊ではなく、連邦ＭＳが必要不可欠だ。

当然、エリート意識に凝り固まったアースノイドは地上を取り返すためモビルスーツ開発を優先させる。

宇宙艦隊再建をないがしろにして…
大鑑巨砲主義を叩きつぶしたうえで、大鑑巨砲主義で決着を付ける。
完全にしてやられた。オレがスタートした段階ですでに目的を達していやがる。
どうしようもない。
こっちはタダの佐官。今からこの話をしたところで誰が信じる？今更どう対応ができる？今から宇宙艦隊を再建させましょう。バカな話だ。
諦めるように帽子を机の上に放り出す。頭の後ろに手を組んで足を机の上に投げだす。
寄りかかった椅子の背もたれがギシッと音を立てた。

だが、別にそれがどうだというのだ？
確かにおれは連邦士官だ。だが、なんてことない中堅クラスの佐官だ。しかも、一切指揮していない官僚的士官でしかない。
ジオンが勝利したところで、宇宙に上がれないオレがソーラレイで沈むこともない。最悪でも職を失うだけだ。
良くも悪くも、この年齢で佐官になったオレの給料は悪くない。貯金だってある。故郷に帰れば家だってあるし、将校だった親の遺産だってある。

最悪でも、しばらく生きるくらいはできる。
勝利を収めてもジオンの人材不足は解消されない。
再就職して、冷や飯くらいの歯車的閑職かもしれないが、Ｖ作戦開始時までのオレからすればそれはそれで問題ない。
最悪、原作知識だってまだ活かせる。Ｚガンダムに出てくるムーバブルフレームやガンダリウムγなど、その先のサイコフレームに関する記憶だってある。ＭＳの発展改良に関して原作知識の引き出しはまだまだある。
ＭＳに乗れない以上、連邦だろうとジオンだろうとどうだっていい事なのだ。
パイロットやエース、ニュータイプといった花形にはなれない。関係ない。
だから、どうだっていいのだ。

ズガン！
机を蹴り飛ばす。大きな音がして机がひっくり返る。
机の上の書類が床に散らばる。勢いで立ち上がり、ついでに座っていた椅子も蹴り飛ばす。すっ飛んだ椅子が壁に当たる。
机の上から落ちた帽子を踏みつける。何度も何度も…
どうだっていいはずだ。

どうしようもない事だ。どうだっていいはずだ。
なのになぜ、オレはこんなにも苛立っているんだ！
帽子を踏みにじりながら、自分の抑えきれない感情に戸惑う。
何度も何度も踏みつける、息が乱れ、帽子がぐグシャグシャになる。
「フーッ！フーッ！…」
肩で息をしながら、床につぶれた帽子を見る。

【…】
ふと、頭に一つのセリフが流れた。
それは、オレの大好きなアニメのセリフだ。女性の声で、何度も何度も見たアニメの、なんでもない1シーンのなんでもないセリフだ。

…ああ、そうか。
オレは機動戦士ガンダムが好きなんだ。
機動戦士ガンダムは、主人公アムロ・レイの活躍で敵を倒してガンダムが勝つアニメだ。
ガンダムが敗北してジオンが勝利する。それはあくまでゲームのＩＦストーリーだ。

機動戦士ガンダムのストーリーじゃない。
そんなものは機動戦士ガンダムであっていいわけがない。
オレの大好きな機動戦士ガンダムで、ガンダムが負けていいはずがない。
いいだろう。ギレン・ザビ。
お前は敵だ。機動戦士ガンダムの敵だ。
だから潰す。オレのすべてを以てお前を潰す。

これは、
オレのガンダムだ！

30　ジムの系譜

「准将。この計画を進めましょう」
　オレが差し出した計画書をコーウェン准将が面食らった表情で受け取る。
　そこに書かれた内容を簡単に説明し補足すると、その内容にコーウェン准将がこちらを厳しい見る。
「開発系統を分ける？」
「はい。連邦軍のＭＳ開発技術はジオンと比較しても遅れているのは事実です。しかし、こちらには組織としての基礎体力があります。ＭＳ開発計画を地上と宇宙で分けるのです」
「ふむ…」
　ＲＧＭ―７９ジムはザクよりも性能が上である。しかし、ジオンとて無能ではない。新型ＭＳを開発しているのは間違いない。ＭＳ―０９ドムだ。なりふりを構わないジオンは、それまでのザクの開発会社であるジオニック社から、ツィマッド社に切り替えたほどだ。
　ＭＳ開発という分野において、ジオンは先を行っている。それに現状のまま追いつく

ことは至難の業だ。
そこで目を付けたのがジオンの局地用ＭＳだ。
ただし、水陸両用とか砂漠専用といったミクロな意味ではなく、もっとマクロな意味での二分化だ。あくまで、地上用と宇宙用だ。
「もちろん、開発情報の集約はこちらで行います。短期的にジオンに勝つには、ＭＳの性能を上げる事は必要不可欠です。そのために、機能を取捨する事で、短期間で新技術を盛り込み性能を上げる事ができるはずです」
ジムのハードウェアには一つ欠点がある。
そもそも、ＲＸ―７７開発時の基礎構造を流用している事。その基本構造は初期段階で完成していたわけではない。一刻も早い連邦ＭＳ完成のために、稼働可能というレベルでしかない。
しかし、当然ＲＸ―７７開発以降も技術開発は進んでいる。新兵器のＭＳ開発において、技術は急成長する新分野だ。
しかし、それらの新技術はＲＧＭ―７９ジムには盛り込まれていない。
そして、それに関してはソフトウェアで対応できない。ジオンと同じように、新技術を盛り込んだＭＳを開発する必要がある。
そして、すべての新技術を盛り込むには時間が必要となる。

そこで、ＭＳ開発を二分化する。同時に盛り込む新技術を地上と宇宙用に振り分ければ、導入する新技術の数を制限できる。

そして、それはＭＳ開発期間の短縮へとつながる。

ジオンと違い、資本力とＭＳパイロットの技術力の均一化がそれを可能にする。宇宙に上がったら、ＭＳを宇宙用に改修するのではなく、宇宙用の新しい機体を用意する。

操縦系統は地上も宇宙も変わらず、その補正はソフトウェアで行う。

ジオンには無理でも、連邦軍なら可能だ。

あ、でもテム・レイ大尉がいないから、技術情報の確証がないや。まあ、そんなのは科学者同士ですり合わせてもらえばいいか。

ついでに、ダメ押しで政治的なメリットを加える。

「月の重工業企業なら、准将の顔も効きます。今から動けば、こちらが主導権を握れます」

「しかし、連邦ＭＳの情報が漏れるのはまずい。月企業は完全に連邦側というわけではない」

「だからこその、教育型コンピューターとＶ作戦です。基礎ＯＳの情報は提供しても、その後の更新情報はジャブローで握っておけば、企業側の首根っこを押さえる事が出来ます」

ジオンのＭＳ信仰はハードウェアに依存する。だから、新機体がぞろぞろ出てくるのだ。

だが、Ｖ作戦の有利性は、ガンダムやジムといったハードウェアではなく、その教育型コンピューターによる、操縦補助システムのソフトウェアだ。

連邦もまたＭＳの性能差をパイロットに依存しているといってもいい。ただ、ジオンのように各パイロットの習熟度によるものではなく、操縦システムのハードとソフトの両面における均一化による操縦のしやすさにあり、ＭＳ操縦の必要習熟度の低さにある。

その補助ソフトはジャブローで秘匿する。

月企業からハードウェアの情報が漏れ、ジオンがそこから連邦ＭＳの性能を知ったとしても、それを操縦するパイロットの技量と補助システムの加算分は手に入れられない。

月企業からＭＳを受領後に、連邦軍でアップデートすればいいだけなので、月企業から手を出されることもない。実戦データは基礎ＯＳで確保しているし、稼働データにそれは必要ないから企業側から求められることもない。

そして、そもそもＭＳの性能を知られたところで、ジオンはドムやゲルググを開発している。安定性と平均的な能力を求める量産ＭＳの技術が革新的な新技術にはなりえ

ない。ＭＳに関しては、ジオンの方が１０年進んでいるのだ。
　もしそれらの革新的な技術が必要なら、それは連邦軍で、ガンダムというテスト機体を作り上げてテストすればいい。
「すくなくとも、現在中東での反攻作戦を前に、宇宙での戦闘に向けた動きは始まってもいません。今なら、他から横やりを入れられずに話を進められます」
　そして、始めたところでジャブロー側にデメリットはない。都合が悪くなって途中でキャンセルしても、相手は月企業。ジャブローの首脳陣にとっては優先度は低い。
　その場合、コーウェン准将の顔が潰れるわけだが、ジャブローでＭＳ開発という基盤を作り上げたコーウェン准将にとって、月企業の後援は絶対必要な要素ではなくなっている。もちろん痛手ではあるが、その場合ジャブローはコーウェン准将に大きな借りができたともいえる。ジャブローに影響をもつコーウェン准将にだ。
　月企業と違って、こちらはジャブローも無視できない。
　そして、うまくいった時はコーウェン准将の一人勝ちである。月でのＭＳ開発。ジャブローと月企業とのつなぎ役としての太いパイプの上に座れる。
「二つの開発情報の統合に関しては、ホワイトベースから持ち帰ったＶ作戦の情報統合のノウハウがそのまま使えます。その点のリスクは少なく済みます」
「フム…レビル将軍にお伺いを立ててみよう」

よし、これでこの計画は８割確定。

Ｖ作戦時に、情報統合をしていたのがオレである以上、作業責任者として俺の影響力は無視できない。それはコーウェン准将も理解しているだろう。同時に、月での開発組織との直接的なパイプ役としてオレが自動的に組み込みこまれる。ついでに、地上用ＭＳ開発へのパイプにもつながっているバイパス機能付きだ。

名実ともに、オレという適任者を無視できない。

さて、次の手と行きますか。

31　切り札『アルテミス』

ジャブローにあるバーのカウンターで、少しお高めの酒をあおる。隣に座るのは大尉の階級章を付けた士官だ。彼もまたジャブローのどこかで進行しているプロジェクトの管理をしている。軍人というより官僚に近い。つまり、今のオレと近い立場の軍人だ。

ただ、オレと違って新任時からずっとそれをしてきたバリバリの管理官である。

「連絡がついてよかった。いろいろ話がしたくてな」

「今を時めく同期の出世頭（エース）が、オレに何の用だ？」

もちろん用事もなく声をかけたりはしない。それは同期の持つ管理技術とかそういう問題ではなく、オレの必要とするプロジェクト管理をしているコネとしてだ。

そういう意味では、士官学校の同期というのはよいコネだ。学校時代にもほとんど話をしたことがない相手であっても、不自然なく話をつけることができる。

「うちのプロジェクトはしっているだろう。一段落して、今度解散再編成し組織改編を行う。オレにもそこそこの影響力が与えられている」

「オレにそこで働けと？」

「…いいや」
　間違いなく花形ともいえるＭＳ開発に回れるのかと期待したのだろう。オレの言葉に少し失望したように肩を落としてグラスに口をつける。
「ウチの技術者を数チームそっちに回そうと思っているんだ」
「ブッ！」
　同期が軽くむせる。
「本気か？」
「もちろんだ。ほぼ確定している。そっちで受皿さえ作ってくれればな」
「受け皿って…」
「『アルテミス計画』」
　今度は噴出さない。だが、雰囲気が変わった。オレの突然の言葉に、瞬時に探られないように意識を切り替えるあたり、オレのようなにわか官僚ではない。
　安心させるように肩をすくめる
「大丈夫だ。オレも詳しい事は知らない。だが、あの計画に人を回すことができる」
　原作知識から連邦がソーラーシステムを開発していることは知っていた。あとは、それに関連する情報を集めるだけだ。結果ありきで調べられるから、他よりも圧倒的に楽だ。

そして、この提案は向こうにとっても喉から手が出るほどほしいものだ。
技術者はどこでも必要としているし、その中でもＭＳ開発に召集された人材は、その分野ではトップクラスだ。今回オレが提示する人材はエネルギー部門や情報統合部門。地味に忘れがちだが、ビームライフルという戦艦主砲を携帯武器にまで小型化する事に成功させたスペシャリストの集団だ。
また、何気にこの為に、オレの仕事の補佐をする者の中からも人材を割いている。
「なぜだ？」
「あの計画が成功すれば、こっちの問題も解決するからさ」
「…」
ああ、やっぱり怪しんでいる。まあ、そっちの機密情報を調べたって暴露しているようなものだ。警戒するのは正しい。
その為のカーバストーリーも用意いているんだけどね。
「オデッサで連邦ＭＳのお披露目は出来る。では次はどこだ？どのみち戦場は宇宙へ変わる。となれば、必要なのは勝利だ。ＭＳを投入して勝つ必要がある。絶対に勝つ必要がだ」
「その為の〝鏡〟か」
「そうだ。たとえそっちのインパクトがＭＳに勝ったとしてもいい。連邦軍が宇宙でジ

オンに勝利したという事実が必要なんだ。ＭＳを投入してルウムと同じ結果になったら、連邦はもう立ち上がれない」

「連邦軍ＭＳだけでは勝てないのか？」

「マシンの性能？パイロットの習熟？はん。後出しで勝っただけで、この戦争に勝てると浮かれられるほど、オレは楽観主義じゃない。向こうは戦争の始まる前からＭＳ開発をしているんだ。経験という引き出しの差は歴然だよ。まともに戦えば勝利と敗北を繰り返す事はわかっている。だが、最初の一戦だけは勝たないとダメだ」

まあ、当然といえば当然だ。こっちは「ザクありき」でジムを作っている。

基礎構造。二足歩行システム。基本動作ソフト。性能がどれだけあがろうと、ＭＳという機器に変更はない。パソコンのＯＳや性能を上げたところで、パソコンに必要なパーツという概念に変わりはない。

兵器である以上、敵の手に落ちるのは時間の問題だ。そうなれば、こちらの技術は向こうにもばれる。オレのソフトウェア更新情報の占有は、時間稼ぎにしかならない。

ジオンはそんなことしないでも、新型ＭＳを作り出せる技術力を持っている。

本当に、ジオン驚異のメカニズムだよ。

オレの内心をよそに、向こうも熟考したうえで肩をすくめる。

「どのみち、否やはないさ。開発過程のスケジュールや、これまでの作業実績は連携して

もらえるんだろう？」
「もちろんだ。向こうの意見を聞いてだから全員そのままとはいかんがね」
「わかっている。こちらで計画の振り分けとスケジュールを組んでおく。いつごろ来れる？」
「一週間」
「早いな」
「年内には宇宙での決戦になるとみている。そこまでに実用レベルまで引き上げないと意味がない。一刻を争うのさ」
「ぶっつけ本番になるか。まあ、ＧＯサインを出させるくらいまでは行けるさ」
「頼むよ」
　同期はグラスを一気にあおると、席を立つ。手を伸ばした伝票をこちらで握ると、軽く口の端を持ち上げて襟元をなおす。
　そして、つぶやくように口を開いた。
「なあ、この戦争。勝てるよな」
　カードを伝票に乗せてバーテン差し出しながら、振り返りながら笑って答える。
「当然だ」

３２　月企業と月派閥

コーウェン准将の意向に従う狐のように、ゴリラ提督の後ろで通信画面を見る。
画面の向こうは会議室だ。正面に映るおっさん以外にも、油ギッシュなオヤジが並んでいる。
今回の会談のために資料準備で忙しかったが、コーウェン准将も（ようやく）積極的に動いてくれたようで、宇宙用ジムの改良開発に携わる企業と渡りをつけたのだ。
その先は
アナハイム・エレクトロニクス
原作ガンダムシリーズでもおなじみの死の商人である。
そもそもなんで「ガンダムのＭＳ開発企業＝アナハイム」なのかと思っていたが、ここに来てようやくあそこに話が言った理由がわかった。
理由の一つ。
アナハイム・エレクトロニクスの主要産業に通信インフラの設備があり、地球でも高いシェアを誇る。
つまり、ミノフスキー粒子と戦争でズタズタの通信状況の中で、秘密裏に連絡を取る

ことのできる能力がある点。
そしてもう一つが、その名の示す通りアナハイムであるという事。
すなわち、旧アメリカ合衆国カリフォルニア州アナハイム。当然、そこが発祥の地でありアナハイム・エレクトロニクスの本社が置かれている。
そして北米であるという事は、現在ジオンの支配下である。カリフォルニアはニューヨークに並ぶジオンの重要支配地域だ。そんな場所にある中立都市フォンブラウンの重工業産業の一角を担う強い影響力を持つ大企業。
ジオンが見逃すはずがない。
そして、最後の一つ。
北米であるという事は
『ガルマ・ザビの戦死』
この一大事件による影響をもろに受けているという事である。
アナハイム・エレクトロニクスはフォンブラウンの影響力を持つ大企業だ。ジオンの支配下にはいった以上、日和見できるほど重要度は低くない。
ジオンの支配下で、大いに協力せざるを得なかっただろう。
で、その結果ジオンの北米支配の大支柱が崩れ落ちたわけだ。北米の状況は最悪だろう。ジオン公王デギンの寵愛激しいガルマの後釜だ。どう見ても顰蹙を買わざるを得

ない。すぐに後任が決まらないのもうなずける。
そして、司令官のいない軍隊がまともに機能するわけがない。後任を狙う北米ジオン将校たちも本国の指令があるわけではない。醜い争いをして代理の地位を手に入れたとしても、それはあくまで一時的なもの。本国からの辞令で簡単にひっくり返る。
そんな相手に全面協力なんてできるわけがない。
ジオンと親密になったために、その状況をつぶさに見ている彼らが未来に明るい展望を持つことはないだろう。
だからこそ、このタイミングでアナハイムに話が行くのだ。
オレがコーウェン准将に提言した宇宙用ＭＳ開発計画は、ただの業務分担ではない。アナハイムにとってもただのビジネスチャンスではない。
もっと大きな政治的な意味を持つ。
ＭＳ技術は当然軍事機密だ。現在戦時中であることから、その委託相手は公募して公開入札するようなものではない。
そして、今回の委託内容は連邦軍主力モビルスーツの開発である。その費用は莫大なものとなる。
つまり、独占あるいは寡占の企業に莫大な利益が提供されるという事だ。
それは、容易に月の企業間の経済バランスをひっくり返すことができるほどである。

一人勝ちするアナハイムはそれでもいい。ひっくり返す側だ。
だが、ひっくり返される側はそうはいかない。死に物狂いの反撃が予想されるだろう。
当然、アナハイムに月の企業連合に対抗できる力はない。そんな力を持つのは大国クラスの力を持つ必要がある。
つまり、地球連邦軍。
この話を受ければ、アナハイムは月企業からの反発を抑えるために、月企業のトップに立つしかない。それをするには連邦の力を借りるしかない。その方法は、ＭＳ開発によって地球連邦軍に確固たる地盤を作り、各月企業とも面識のあるコーウェン准将に頼るしかアナハイムにはいない。
つまり、この瞬間。アナハイム・エレクトロニクスはコーウェン准将の下につくしかないという事だ。
そもそも、コーウェン准将がジャブローに来たのは、Ｖ作戦成功の為ではなく、月企業のパイプつくり。その為の捨て駒だった。
月企業と月派閥の連邦将校の関係はそれほどだった。
だが、この計画でその立場は逆転する。月企業の中でアナハイムがトップに立ち、各企業を抑える。その後ろ盾は地球連邦政府。引いては地球連邦軍だ。そのパイプ役が

コーウェン准将。

アナハイムは、連邦の庇護を得るためにコーウェン准将を切り離せない。

そして、アナハイムは月企業を抑え続ける必要が出てくる。その為に使うのはＭＳ開発の莫大な利益か、連邦軍という後援者の威光か。その辺の苦労は画面の向こうの親父たちが死に物狂いで頑張ってくれるだろう。

もちろん、一度つまずいたら即終了。アナハイムは月企業から一片の慈悲なくたたきつぶされるだろう。

だが、今現在のアナハイムの立場が、そのリスクを飲み込まざるを得ない状況だ。北米の混乱と、ついにはじまった中東反攻作戦「オデッサ」。

この作戦に連邦が勝利すればジオンによりすぎていた自分たちに未来はない。今回の要求を断ればなおさら絶対にありえない。逆に、オデッサでジオンが勝ったとしても、待っているのは北米で沈む泥舟派閥を選ぶという罰ゲームだ。そのどれもが致命的な危険をはらみながら、一切のうまみがない。

彼らに選べる選択肢など初めからないのだ。

それを見越して話を持って行ったあたり、コーウェン准将もただのゴリラではない。

２００１年は過ぎたけど、黒いモノリスでもオフィスに届いたのだろうか。

「技術情報のやり取りは、こちらのカルナギ中佐を仲介して行ってもらう」

コーウェン准将の紹介で、画面向こうの視線がこちらを向く。
一言も言葉を発することなく、黙って頭を下げる。
それで終わりだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊

通信を終えた会議室で、アナハイム・エレクトロニクスＣＥＯのメラニー・カーバインは肘掛に手を置いて重役たちを見る。
すでにコーウェン准将と通信が始まる前から、彼らとの会議の末に結論は出ていた。
アナハイムが生き残る道は他にはないと。
「ジャブローの将校たちと連絡をとれ」
「コーウェン准将以外のですか？」
「そうだ」
「しかし、我々にはそこまで強固なつながりは…」
「我々が求めるのは連邦軍の後ろ盾だ。准将一人の庇護ではない。月の他の将校経由でも構わん。ツテでもコネでもいい。それがなければ、我が社に未来はない。生き残るためには、枝葉は広く伸ばす必要があるのだ」
そして、口には出さず心の中で続ける。

「（そして、根は枝葉よりも広く、静かに伸ばさねばならん…）」

33　ニュータイプ研究

アポイントメントをとって応接室で待っていると、ジャミトフ・ハイマン大佐が入ってくる。
「よくやっているようだな」
開口一番、皮肉とも称賛ともとれる言葉を口にする。
「まあ、なんとか」
肩をすくめて謙遜してみせる。
…ところで、この人。なんでこっちの状況まで知っているのでしょうか？ジャブローの財布を握る経理の実質ＴＯＰであるわけだが、その手の広さに関して、オレは尻尾もつかめなていない。
階級は一個しか違わないのに、向こうは（傀儡の）上官すら掌握する怪物で、こっちはゴリラのおまけだ。役者が違いすぎる。
「で、何の頼み事だ？」
「はい…」
一応、別部署の一階級しか離れていない『お客様』であるはずのオレに向かっての傍

若無人な言葉に、呆れるように返事をしながら用意した資料を差し出す。
もう、頼みごとをするために来ていると思われているようだ。まあ、あながち間違いじゃないから仕方ないんだけど…
『ニュータイプ専用モビルスーツ開発計画』
オレが机に出した計画書の題名に視線を走らせる。
「ニュータイプという言葉をご存知ですか？」
資料を手に取ろうともしないジャミトフ大佐に声をかけてみる。
「ジオンの提唱するスペースノイドの革新とかいうやつだろう？」
「もう一つあります。ジオンが現在進めている新兵器の名称です。とはいえ、それがどんなものかはわかりません」
そういって肩をすくめる。
まあ、当然だ。オレだって原作知識からあると知っているだけで、諜報活動による報告を元にしたものではない。そもそも、ＭＳ開発の管理官でしかないオレは諜報部につながりもない。
「新型量産ＭＳ開発計画に当たり、月との交渉の際に提供された話の一つです」
そんなわけで、情報の根拠となるカバーストーリーを用意している。
いくらジャミトフ大佐の手が広いと言えども、それはジャブローでの話。月勢力が

ジャブローと縁が薄いという事は、逆にジャブローもまた月との縁は薄い。得意の経済の話であっても、基本地球圏の経済の中心は地球であり、大きいといっても月はあくまでも宇宙限定での話だ。

「ＭＳの次に、ジオンはこれを出すとみています。こちらも遅れるわけにはいきません」

「…話にならんな」

そういうと、見出しだけ見た資料を突き返す。

「まず第一に、ニュータイプとやらの研究が何を意味するのか分からん。そんな不確かなものに、出す金はこちらにはない」

まあ、何をするかも不明な計画に、どれだけ予算を出すのか。そもそも、その研究が必要なのかの段階から不明瞭だ。前にも言ったが、それにどれだけ予算を付けるのかが経理部の仕事である。その判断がつかないのに、おいそれと財布を開けるわけがない。

まあ、そこは想定内。その為の用意も済ませている。

「ちょっと、政治的な話をしましょう。大佐」

笑みを浮かべ、膝の上で手を組みジャミトフ大佐を見る。オレの態度にジャミトフ大佐は片眉を上げて口をへの字に結ぶ。

「別に、今すぐ何かを作るというわけではないのですよ。箱がほしいのです。看板付きの」

「…ふん。名分か」
まあ、要するにニュータイプ研究を行う際に、先に唾をつけておきたいという話である。ジオンがＮＴを研究し軍事利用する。それはいつか必ず連邦軍上層部の耳にも入る。その結果、連邦軍でも対抗手段として研究がおこなわれるはずだ。
そうでなくとも、モビルスーツという新兵器を前に、連邦はここまで辛酸をなめてきた。当然、連邦軍はジオンの〝新兵器〟というフレーズに過敏になっている。
実際にそうなった時に、すでにその研究をわずかでも始めている部署があったら？
連邦の選択肢は一つしかない。
「だが、そうするためにも建前が必要だ。ニュータイプが何を意味しているのかも分からない状況で…」
「なので、ホワイトベース隊をニュータイプという事にします。そして作るのはニュータイプ用機体という名目で高性能機体を作ります。ジオンのエースパイロット専用機と同じコンセプトです。最新技術を盛り込んだ新型機。何せニュータイプという新兵器も新技術ですからね」
これには二つの利点がある。
一つは、新技術を盛り込んだ高性能試作ＭＳの開発ができる点。
新技術というのは、効果が未知数で、安定性が不明の技術だ。そのままいきなり量産

機に反映させるようなことはできない。
その為に、新技術や新コンセプトの試作が必要である、各部署はその為にフル稼働で、研究を始めている。
そこに、オレたちも乗ろうという話だ。
ただし、他の部署で開発される試作機と効果が重複するような事は不和の種だ。利権関係もあるし、そもそも量産機開発というド本命の利権を持っているのに、他人の功績までかっさらうと言われたら反感は必至だ。
なので、ニュータイプ研究と銘打つ。新技術の開発部署は、ようやくＭＳ開発に着手したばかり。このジオンの新兵器に対応できていない。
つまり、どこともかぶらないし、文句も言われない。そもそも研究内容がわからないのだ「量産ＭＳに転用可能な技術です」と言ってしまえば、だれにも文句は言えない。実際違ったとしても、それはそれで試行錯誤の段階である以上、致命的な問題にはならない。
必要なら手放すことで、一定の利益を見込む事だってできる。
そして、もう一つはそのＮＴ部隊をホワイトベース隊とする事。
ニュータイプと銘打って開発する以上、なにがしかの成果を出す必要がある。
その成果が、アムロ・レイ専用機の開発だ。

別にこれにニュータイプ特有の何かを導入する必要はない。ジャミトフ大佐に言ったように、「パイロットのアムロ・レイの力を引き出す性能」があればいい。何せ、ニュータイプが何かわからなくても、アムロレイが原作通りに敵を倒し続ければ、それが実績となる。

たとえ、新機体に乗る前に終戦を迎えたとしても、「ニュータイプであるアムロレイのための機体」という名目には一切傷が付かない。

そして、その為の条件がオレ達にはそろっている。

オレたちの主な作業である量産機のアップデートの為に、マチルダ隊がガンダムのデータを回収してジャブローに運んできているからだ。

当然、そのデータは、パイロットであるアムロ・レイの物だ。

そのデータをもとにアムロ・レイの専用機を作るので、わざわざ前線からパイロットを引き抜き操縦データを集める必要がない。教育型コンピューターに実戦データという情報が蓄積されているからだ。

つまり、ホワイトベース隊をニュータイプ部隊とすることで、専用機開発の下地ができているという事だ。そして、それができるのは、そのデータを占有しているウチのチームだけという事になる。

とはいえ、問題がないわけではない。

「…ホワイトベース隊をニュータイプ部隊とする根拠は?」
「ガルマ・ザビの撃破だけではだめですか?」
やはりそこをついてきたか。
赤い彗星の攻撃をしのぎ、ガルマ・ザビを倒したホワイトベース隊だが、文字通り通常の能力を〝超える〟超能力部隊とする確証にはならない。「エースパイロットだから」というジオン的な理由の方がまだ現実的だろう。だが、それではダメな理由がある。
「足らんな。そもそもニュータイプが何かわからない以上、何をどうするかの判断がつかん」
「そうですか…」
となると、ランバ・ラルを倒したあたりで再提出か。あるいは黒い三連星まで待たないとだめか…
「とはいえ、看板だけなら可能だ」
「いいんですか?」
なんだこのジジイ。ついにデレたか?いやいや、まてまて。それはない。それだけはない。
利益がなかったら、このリアリストの権化が好意的な話をするわけがない。
いぶかしむオレに、お返しとばかりに笑みを浮かべ、ジャミトフ大佐はソファの背も

たれによりかかる。
「看板だけだ。実際に予算を付けるのは後でも構わんだろう。それと…」
ほらきた。
「箱はこっちで用意させてもらう」
そう来たか…
看板はこっち。つまりＮＴ開発の名分はオレ（コーウェン派閥）。ただ、実際の研究機関などはジャミトフの派閥（に近い人員）で開発を行うわけか。
名前はこっちで実利は向こう。こいつは本当に正真正銘の実利主義のリアリストだよ。畜生。
なんだろう、連邦の利権が複雑化する理由をかいま見た気がするぜ。
まあ、名分がこちらにあるので口を出せるから、ジャミトフ大佐も一人だけ美味しいってわけにはいかないだろうけどな。
了解した事を表すように、差し戻された計画書を再度ジャミトフ大佐に差し出す。
今度はそれを受け取り、中に目を通しながら、ジャミトフ大佐が口を開く。
「まずは、ホワイトベースが生き残ればだがな」
「まあ、その辺は何とかなるでしょう」
「…君は時々、そういう風に言うな」

オレの言葉に、見ていた計画書から目を上げて、ジャミトフ大佐がそう言った。

３４　オデッサ作戦しているらしい

オデッサ作戦が始まった。

とはいえ、順調からは程遠いレベルだ。すでに始まっているはずのオデッサ作戦はすでに一週間以上遅延している。

まあ、それでも始まったといえば始まったわけだ。

言っておくが、オレが悪いわけではない。

一年戦争当初からの惨敗で、指揮官の数が圧倒的に足りないのだ。ついでに言うと、前線で指揮する士官はもとより、大規模作戦を支える後方支援の人間も圧倒的に足りていない。

そんなわけで、ゴリラの前線出張サービスである。

オレは身体的理由からジャブローで留守番…ではなく、引き続きジムのバージョンアップ作業の継続である。

まあ、コーウェン准将・・・あらため少将（暫定）の前線出張も、あくまで参加する連邦ＭＳのお披露目のためという意味が大きい。Ｖ作戦の司令官であるコーウェン准将が前線で連邦初のＭＳ部隊を指揮する。もちろん、虎の子の連邦量産ＭＳなので、連

邦総大将のレビル将軍のおひざ元でだ。
つまり主流主戦派のど真ん中で、暫定階級である少将へのお披露目もかねているわけだ。
うきうき制服を新調して出かけるのも分かる話だ。
まあ、問題は残されたこちら側である。
アナハイムとのやり取りに、地上用新型ＭＳ開発。さらに現在のＲＧＭ―７９ジムのソフトウェアのバージョンアップである。
さらに、コーウェン少将をスルーしてジャミトフ大佐と始めたニュータイプ用ＭＳ開発まで始まって（書類関係だけだが）てんてこ舞いだ。
さらにオデッサ作戦の開始と、遅れを取り戻すための過密スケジュールで、こちらの要求が後回しにされたりと、面倒ごとが絶えない。
ついでにいうと、コーウェン少将のオデッサ参加を受けて、出撃するＭＳのメンテナンスその他のために、各部門の科学者や管理担当官も付いて行ってしまっている。
まさに、三重苦というヤツだ。
まあ、そんな悪いことばかりではない。
原作キャラからの感謝のメールだ。
なんて事は無い。

『ニュータイプ用ＭＳ開発』の発足により、看板だけとはいえ連邦軍がホワイトベース隊をニュータイプ部隊と認定したのだ。

そしてそれは、ホワイトベース隊への補給物資の優先度を跳ね上げる事につながる。これまではレビル将軍の個人の威光で回された物資に、連邦軍のお墨付きが付くからだ。

当然才女マチルダ中尉も、この看板を最大限利用するはずだ。

そんなわけで、ホワイトベース隊をニュータイプ部隊とする旨を知らせたオレの元に、マチルダ中尉から感謝の手紙が来たわけだ。

ジャミトフ大佐も認識しているように、ニュータイプ研究が始まった以上、ホワイトベース隊の壊滅は計画の失敗を意味する。

その原因になったとなれば、今をときめくＭＳ開発派閥の雄コーウェン少将と、ジャブローの経理部の怪人ジャミトフ大佐の不興を買う。策謀術数のジャブローでそれは致命的だ。それが正当な理由であっても左遷待ったナシである。

なるほど、そんな理由だったとは・・・

オデッサ作戦という大規模作戦で、物資輸送のピークとも言える中で、何でホワイトベースというイレギュラー的独立部隊に、ミデア機まで使って補給物資が届けられたのかと思ったら、そんな理由だったんだな。

もちろん、ホワイトベースがオデッサ作戦に参加するからという大義名分があったからだが、それを抜いても、レビル将軍に二つの有力派閥の庇護があるとすれば、連邦上層部も配慮する理由は高い。

まあ、そのおかげで、ガンダムが獅子奮闘の活躍をするわけだ。

『とりあえず、無茶はしないように』といった内容で返事を書く。

まあ、おそらく無理だろう。今のところ原作どおりに話は進んでいる。そして、彼女の死が黒い三連星撃破の合図となる。

それはホワイトベースの功績。そして、それはホワイトベース隊が特別な存在である〝ニュータイプ部隊〟であるという主張を後押しする事になる。

唯一イレギュラー的存在である転生者のオレは原作推進派だ。それをとどめるつもりはない。

止める事はできないのだ…。

ほんの少し逡巡してオレは手紙を送信した。

３５　モビルスーツの時代

オデッサ作戦終了。

原作だと長いように思えたが、実際１０日前後。実際の戦地での戦闘は２～３日程度で終わったらしい。まあ、大規模戦闘が２～３日続いたのは、それはそれで激戦だったともいえるだろう。

そして、

ホワイトベース隊、青い巨星撃破。

ホワイトベース隊、黒い三連星撃破。

ホワイトベースの戦果はオデッサ作戦での多大な功績として喧伝された。

そうでなくても、連邦の一大反抗作戦である。それまでの惨敗続きだった連邦からすれば、士気をは少しでも上げる必要があるだろう。多少過剰ででも彼らの勝利で喧伝させることにためらいはない。

それくらい連邦上層部は切羽詰っていたともいえる。

その行為をジャミトフ大佐は見逃すことはなかった。こちらが提出していた『ニュータイプ専用ＭＳ開発計画』の大義名分を得たとして、即座に予算を投入。すでに箱は

ジャミトフ大佐が用意していたので、こちらのもつアムロ・レイの情報とＭＳ開発情報を提供。

当然だが、Ｒｘ―７８の情報は残っているので、それに合わせて専用機のベースを作る。後はそこに最新技術を盛り込むだけだ。つまり準備はすべてそろっている。

そして、こちらもそれに対応する。ジャミトフ大佐の動きに合わせるように、ＲＧＭ―７９ジムのアップデートを完了させた。

完全に終了である。

オデッサで先行量産型のジムが実戦配備されたことで、文字通り実稼動する事になったためだ。もちろん、今後も調整はとられていくのだが、ＲＸシリーズからのデータ反映という意味でのアップデートは予定していない。今後はジムの実戦データを、そのままジムに反映させていくという形になる。

文字通り、Ｖ作戦のすべてが完了したという事だ。一応、ホワイトベース隊のＶ作戦への役割は終わりだが、今後は『ニュータイプ部隊』として関与し続ける事になる。まあ、技術面だけだけだけど。

正直、まだまだジムには改善する余地はあるのだが、すでに新型が開発されている現状で、限界のある旧シリーズに固執する意味がない。

それらの改善事項は、地上用ＭＳ開発と宇宙用ＭＳ開発の両者へ情報を提供するだけ

だ。これで、新型のバージョンアップに合わせて、必要な更新データを現行のジムにアップデートする形に変わる。

なんとなく、原作で旧式ＭＳがその後開発されたＭＳにある程度対応できていた理由が見える。

要するにロールアウトした新型ＭＳなんてものは性能を１００％引き出した究極機器ではなく、安全性を重視した機械なのだということだ。

ちょっと動かしただけで壊れるような機械は欠陥品である。金のかかった最新鋭機でそんな事をすれば、すぐにお役御免だろう。

その点、すでに実戦配備されて酷使された旧機体は、使いつぶされた事で機体の不安定箇所が洗い出される。そこさえ解消させれば、設定されているリミッターをはずしても簡単に壊れる事はない。不安定さはパイロットの腕で十分補うことが出来る。

原作でジオンの残党が連邦軍にある程度抵抗できていた理由は、そういう形で旧式ＭＳを改良して性能をギリギリまで引き出した結果ということだろう。

多分、このジムをギリギリまで改造していけば、今開発している新型ＭＳ以上の性能を引き出すことが出来るだろう。

まあ、当然それ以上の性能が出ないわけだし、同じ理由で新型を改造すれば、それ以上の性能を引き出せるということになるのであまり意味がない。

一年戦争後のジオンのように、手元にあるＭＳがそれしか使えない状態ならまだしも、連邦軍においては旧型のＭＳをギリギリまで使い続けるメリットはないわけだ。新型ＭＳを開発配備したほうが、最新技術を導入し続けられる。安定した状態で使い続けられる。

本当にモビルスーツというのはよく出来ている。汎用機というのは用途の事だけではなく、その後の拡張性まで含んでいるという事だ。

ＲＧＭ―７９の手仕舞いと、開発している新型機への体制の移行を行う。

最後に、マチルダ・アジャン中尉の戦死報告は、オレにはまわってこなかった。

部署も違う。役柄も違う。そもそも個人的な付き合いでしかない為、当然ともいえる。

ただウッディー大尉から、月末に予定していた結婚式中止の詫び状が届いた。

３６　裏取引の手引き

オデッサ作戦が終わり、Ｖ作戦は完了した。ジムの量産体制も整い。次期量産ＭＳの開発も順調に進んでいる。

ホワイトベースからの情報が入ってこなくなったが、ホワイトベース隊がジャブローに来る予定なので、その時データを回収すれば問題はない。

「そちらの状況はわかっていますがね、正直こちらとしては満足しているとはいえません」

年下のオレの言葉に、眉一つ動かさず、経営スマイルを崩さない画面の向こうのオッサン。

こういうのを見ると、前世で日本のビジネスマンが海外で営業スマイルを崩さなくて不気味だ。といわれていたのを思い出す。

『スケジュールに合わせて進捗はしています。しかし、それ以上の要望にはお答えできないといっているのです』

「私としては、情報を提供しておきながら「できませんでした」と言われるのは心外です」

『しかし、納期の繰り上げとは…』

アナハイムにアウトソーシングした宇宙用量産ＭＳ開発は何とかスケジュール通りに進んでいる。とはいえ、それはかなりギリギリの状況だ。

重工業のノウハウがあるといっても、アナハイムにはＭＳを開発した経験はない。そんな中で、Ｖ作戦並みの開発速度でＭＳを作れというのがそもそも難しい話なのだ。

ジオニックかツイマッドのようなＭＳを作った経験があるなら、それをベースに新型ＭＳを開発できただろう。オレがあの短時間にＶ作戦を完成できたのは、原作知識というチート能力があったからだ。そもそも、コーウェン准将も最初はＶ作戦が成功するとは思っていなかったほどだ。

そして、ＭＳ開発の経験も原作知識もないアナハイムにとって、短期間でのＭＳ開発は難しいプロジェクトだ。おそらく向こうの社員はブラック企業も真っ青な勤務状況だろう。

そこに、さらに追加要件である。向こうが緊急回線で連絡してくるのもうなずける。

「わかっているでしょう。ジオンとの決着は宇宙です。決着がついた後に、最新ＭＳを渡されても意味がない」

オデッサが連邦の勝利に終わった以上、地上のミリタリーバランスは連邦に大きく傾いた。そして、それはジオンと連邦の国力差によってひっくり返る可能性は低い。ブー

ムを作ったベンチャー企業と、財閥系大企業レベルの差がある。本気になればどうなるか。

それをオデッサという形で見せつけられたに等しい。

予断は許さないとはいえ、地球という地球圏最大の経済圏の支配状況を一転させるとみて間違いはないだろう。

そして、地球を取り戻して戦争は終わりではない。敵を倒す必要があるなら、敵の領分に食い込まなければならないのだ。

侵略とはそういう事だ。

誰の目にも、宇宙での決戦が近いことは明白である。

まあ、オレは最初からそれがわかっていて、ギリギリのスケジュールをアナハイムに渡したわけだがな。

『それはそちらの都合です』

「そのとおり、顧客の都合ですよ」

『…こちらの予算は連邦軍ほど潤沢ではないのです』

「それこそ、企業の得意分野ではありませんか。特に交渉ごとに関しては、戦うだけの軍人よりもよっぽどね」

一つだけ方法があるのだ。

原作知識を得る事はさすがにできないが、ＭＳ開発のノウハウを手に入れる方法が。
「最新技術についての稼働データを提供する事はできます」
『…』
画面の向こうの顔から笑みが消えた。
『何がお望みです』
「ジオンがＭＳ―０９に代わる新型量産ＭＳを開発した事は知っています。問題なのは、御社に依頼した新型ＭＳがそれ以下の性能しかないというのは避けたいわけです。絶対に」
『そちらの提示した性能を満たす機体は作成しております』
「だから、＋αが欲しいと言っているのです」
その為の代価として、最新技術の稼働データを提供しようといっているわけだ。
ニュータイプ専用ＭＳの開発は進んでいる。そもそも量産体制や生産性度外視のうえ、予算マシマシで始まった開発計画だ。ＭＳ開発最大手のコーウェン派閥（つまりオレ）から最大限の情報と開発手法を得て順調に進んでいる。
あと半月もすれば機体は完成するだろう。その後宇宙に打ち上げて宇宙決戦用に再調整。完成まであと一か月といった所か。
別に、ＮＴ用ＭＳに搭載されている最新機能を量産機に盛り込めと言っているわけで

はないのだ。ＭＳ開発のノウハウを手に入れろという話である。
連邦のノウハウは提供した。
それで足りないのなら、別から持って来いという話だ。そして、月企業のアナハイム・エレクトロニクスならそれを手に入れられる。
連邦より１０年進んだノウハウを。
無言でこちらを見るオヤジに、にこやかに笑って見せる。
うん。オレも十分胡散臭いわ。

37　駒と情

カツカツカツ

「中佐」

ジャブローのある通路を歩いていると声をかけられる。

振り返ると、黒髪の男が小走りにこちらに向かってくる。その顔に、心の中でちくりと罪悪感がうずいた。

「久しぶりです。ウッディー大尉」

ウッディー・マルティン大尉。

自業自得ともいえるが、この人物に面識があった。そもそも、V作戦の量産MS開発の管理をさせた上で、さらにその権限を取り上げたという経緯がある。

一応、昇進した上に花形部門への栄転になっているので、奪うだけではないのだが、それ以上に、彼には引け目があった。

彼が、戦死したマチルダ・アジャン中尉の婚約者であるという事だ。

「中佐。先日は急な連絡で申し訳ありませんでした」

「いいえ。今は戦時中です。あなたの方こそ気を落とさずに」

奇しくも新郎新婦ともに面識があり、両者ともある程度好意的な関係を結んでいたオレは、両者の結婚式に招待されていた。オデッサの後始末がありジャブローで出席できる連邦士官の数が少ないというものあったと思う。
そして、先日その中止の連絡を受け取っていたのだ。
わざわざ呼び止めての事は、彼の配慮なのだろう。
話を逸らすように雑談交じりで通路を歩く。
「ところで、ご存知ですか？」
「ん？」
「ホワイトベースがジャブローに戻ってくるという話です」
「…ああ、そんな話もありましたか」
「中佐はお会いになるので？」
「ホワイトベース隊と？いいえ」
もちろん。ＲＸ―７８のアムロ・レイのデータはもらう。しかし、オレがホワイトベースのブライト艦長やアムロ・レイ本人に会う予定も必要性もなかった。
無理をすれば会えると思うし、ガンダムオタクとしては一度会ってみたい気もするが、今そうするつもりはない。
彼らは駒だ。駒にしなければならないのだ。

余計な情を持てば後悔する。諦めたくなる。それは今隣を歩いている人間にも言えた。

オレの心の中など知るはずもなく、ウッディー大尉は楽しそうに言葉を続ける。

「ベルファストから簡単な報告が来ているので、その修理のための準備で大忙しですよ」

「修理？君が？」

「ええ、マチルダの思いのこもった船です。なんとしても直してやりますよ。」

そう言って、婚約者の名前を出しながら、少し無理したように笑うウッディー大尉に、再び心の中で罪悪感がちくりとうずく。

もし、オレの病気がなくＭＳパイロットになったとしたならば、オレは敵を倒して、あるいは味方に死なれて、今と同じ罪悪感を感じたのだろうか。

諦めろ。コウイチ・カルナギ中佐。お前は彼らを駒にしなければならないのだ。彼らの死は無駄死にではない。それが無駄に見えたとしても「原作通りに」に死んだ事には意味がある。そう思わなければならないのだ。

でなくば勝利はない。勝利させる方法がない。

確実な勝利に導く事ができない以上、どんな事をしてでも不安要素は取り払わねばならない。その為の唯一の指針。その為の唯一のよりどころ。

その為なら、自分すら駒にする必要がある。

だから…

「あまり無茶はしないように」

そう言って、彼の婚約者に伝えた事と、同じ事を言った。

もう後には引けないのだ。

38　最後の1ピース

アナハイムとの情報交換により、ジオンＭＳの情報が入ってくる。
そしてその内容に首をひねる。
あれ？これってギャンじゃん。
もちろん、ゲルググの情報も入ってくるのだが、その中にはゲルググとのコンペで落ちたギャンの情報がミックスされていたのだ。
当然だが、ゲルググの製造元のジオニック社とギャンの製造元のツィマッド社は違うわけで、断片化された情報を合わせても正確な姿が出てこない。
おかげで、一瞬原作ではない何か特殊なＭＳを開発しているのかと背筋が凍った。
まあ、わかってしまえば対応は簡単である。二つのＭＳの情報を原作知識で取捨選択すればいい。
とはいえ、これはこれで面白い。
連邦のような軍部主導のＭＳ開発とは違い、ジオンは複数の民間企業による競合で、ＭＳ情報が入り乱れる。それだけで欺瞞情報になるわけだ。
そもそも、国力差が３０倍というのは軍事力や生産力だけの話ではない。総合力であ

る以上、ジオンの国防能力も圧倒的に劣っているといえる。
だから、連邦のような縦社会ではなく、横社会で各部署の独立性を高めているわけだ。それら個々の連携も統括もないから、情報を手に入れるにはそれぞれから入手する手間が必要になる。
まあその結果、一元管理できないから各部署の独断専行とか足の引っ張り合いとか内紛が起こるわけだ。それも善し悪しといった所だろう。
ジオンが『秘密兵器』の開発に躍起になるわけだ。機密情報を秘密にできない以上、何を守るかはは取捨選択し、特定の機密を守ることにリソースを割り振るしか連邦の諜報から守り切れない。結果、絶対守らなければならない情報だけとなり、それ以外の量産ＭＳの情報という機密を、ＭＳ開発の本流から脱落しているアナハイムが入手し、こっちに提供できるわけだ。
しかし、ガバガバだからといって情報漏洩を指をくわえてみているわけにもいかない。
だから、情報を分散させて混在させる。ザクに対してヅダ。ドムに対して高機動型ザク。そして、ゲルググに対してギャン。
二つの主力となる情報を用意して、漏れる場合のダミーにする。さらには、ジオニックのザクに、ツィマッドのドム。そしてジオニックのゲルググと、量産機の開発メー

カーすら一つにしないことで、特定される事の欺瞞工作にする。
代用案として悪くない方法だ。
まあその結果、規格がメチャクチャで整備に支障をきたしたり、パイロットの乗り換えの難易度を上げたりと弊害も多いわけだ。
「とはいえ…」
面白がっているばかりじゃ済まない問題もある。
入ってきた情報をゲルググとギャンに振り分けて並べ直してみるが、目を見張るような新情報がない。
もちろん、ジオン脅威のメカニズムなわけだが、当然向こうから送られる情報は量産機である。
最新技術とか、革新的な新技術といったようなものとは無縁だ。
基本性能や期待数値といった物を推定することは可能だが、だからといって連邦量産ＭＳに簡単に転用できる話ではない。
そもそも、宇宙用量産ＭＳを開発しているのがアナハイムなわけで、当然オレに提供されている情報をアナハイムは知っている。このＭＳに対抗した性能を持たせる為に努力するのはアナハイムであって、オレではない。
これらの情報を元に出来る事は、せいぜいジオンの量産ＭＳの性能を推定し、その数

値と比較してロールアウトされる新型連邦量産ＭＳの合否をするくらいだ。
当然、アナハイムだってそれを理解している。情報提供するアナハイムが無条件に全情報を提供しているとは考えられない。
オレの対応を想定して情報の取捨選択をしているのは間違いないだろう。
ギャンとゲルググの情報を混ぜ込んだのだって、わざとでないという保証はない。
背もたれに寄りかかりながら、天井を見上げる。
「タヌキめ…」
ジオンの量産ＭＳの情報を得る為に、こちらが提供したのは『ニュータイプ専用ＭＳ』に組み込まれる最新技術「全周囲モニター」や「マグネットコーティング」の稼働データだ。
これらの情報をアナハイムは有効に使っているだろう。
こちらの最新技術の情報をジオンに高く売りつけ、さらにこちらに提供する情報は、自分達に不利にならないようにコントロールする。
この状況にあってなお、自分たちが不利にならないように立ちまわっている。
正しくガンダムの世界を裏で操る怪物だ。
多分、面の皮がジャブローの隔壁ぐらいあるだろうな。舌だって対空砲火の数ほどあるに違いない。

だが、オレの攻める場所はそこではない。
オレの目的はそれではないのだ。
運命がカードを混ぜた。
そして、オレの手札がそろった。
アナハイムから提供された情報の内容にはあまり重要ではない。だが、ジオンの情報が提供された事には、深い意味がある。
勝負だ。ギレン・ザビ。
原作知識というイカサマを駆使し、鬼札はこちらの手中にある。
運命がカードを混ぜ、我々が勝負する。

３９　かつての上司

ジャブローが襲撃された。そのニュースは当然ジャブロー全体に広がり騒然となる。
連邦本部ジャブローについにジオンのＭＳの手が伸びたのだ。
…まあ、ジオンの手が伸びるのは宇宙船ドックで、オレは当然そんな危険地帯にはいない。
戦闘自体も、騒ぎの割にはそう大きくなることもなく終息した。
そんな中、一人の人間から呼び出しを喰らう。
もちろん非公式というかプライベートでだ。
これで相手がきれいな女性士官ならうれしいのだが（そんな当てはないのだが）相手は、その正反対にいるような人間だった。
「何を考えておる」
バーのカウンターで悪役顔の老人が詰問するような強い口調で聞いてくる。
もちろん相手は、オレを呼び出した相手。ジャミトフ・ハイマン大佐だ。
横目でにらむ鋭い目から視線を逸らすように、グラスに口を付ける。

「査察が動き始めた。お前だってわかっているだろう」
「ええ、そのようですね」
「…」
オレの言葉に、横目で様子を窺うのをやめてこちらを見る。
グラスをおいて、首をひねってジャミトフの目を見る。
そこから何か読み取ったのだろう。ジャミトフの眉間に皺が寄る。
「それは逃げだぞ。いや、諦めといってもいい」
「違います。これは結果です。これまでの行動も、そしてこの結末も」
「…」
なにが?と聞かないところがジャミトフ大佐のいいところだ。どうせ聞いても答えないとわかっているから、余計な事は聞かない。
そういう意味でも、オレの理想の上司かもしれない。部下を切り捨てることができる人間だ。
オレから視線を外し、グラスに口を付けながら、何気ない風を装ってジャミトフ大佐が口を開く。
「もし、椅子を用意してやると言えば、考えは変わるか?」
「…いいえ」

その言葉に一瞬息をのむ。
オレの状況を読み取った彼の最適解の行動の『ニュータイプ専用ＭＳ開発』の研究所を掌握することだ。オレとの密約でコーウェン派閥主導となっているが、研究所を用意をしたジャミトフの影響力はまだ残っている。オレやコーウェン少将との関係が悪化するが、落ち目の人間に配慮する必要もないし、これからかかる火の粉を振り払うために、ジャミトフの強引な手法に対抗する余裕が無くなる。
それが、最も利益を得る方法だ。
そのはずなのに、あの実利主義の権化が、最適解ではなく次善策を差し伸べている。
その配慮に感謝しつつも、首を横に振る。
己の保身を考えていたなら、オレはこの場にはいない。
「そうか。わかった…」
そういうと、ジャミトフはグラスに残っていた酒を一気にあおる。そして、グラスを置くと体勢を変えオレを正面に見るように座り直す。
そして、鷹のような鋭い目をこちらに向ける。
「…」
「お前はどうしようもない奴だ。行動は早いが、確認を怠る悪い癖がある。お前は本来もっと多くのミスをしている。それがなかったのは、周りのフォローと、ただ単に運が

よかっただけにすぎん」
ジャミトフの言葉に、頬が少し緩む。
それが、新任少尉としてジャブローの経済部でしごかれ、その後月へ配置換えが決まった時、二人だけでバーで飲んだ時と同じだったからだ。
「前と違って、根回しをする事を覚えたのは褒めてやる。だが、相変わらず悪い癖は治っておらん。そういう意味では、今回の改善では不完全という事だ」
あの時と同じ、悪い所、良い所を列挙していく。
事務的に、単的に。
そして、
「そこについては、自分で考えて改善するがいい」
前の時と同じように、そうやって話を締めくくる。それが彼の流儀。彼流の手向けなのだろう。
そのままジャミトフは席を立つ。それで終わりだ。
前の時と同じように、それで終わる…
…はずだった。
肩に手が置かれる。そして、言葉が続いた。

「それが出来たら、椅子を用意してやる」

驚いて見たかつての上司は、振り返りもせずバーから出て行った。

40　今の上司

ホワイトベースがジャブローを出発した日。
オレは、コーウェン少将のオフィスを訪れていた。
「重要な話があります」
オレの態度から、何かを察したのか、コーウェン少将はきちんと時間を取ってくれた。
オフィスの中で待ち構えるように手を組むコーウェン少将に、わきに挟んだファイルを差し出す。
「こちらを…」
ある程度、覚悟を決めていたであろうコーウェン少将だったが、その題名を見て目を剥いた。
『コウイチ・カルナギ　情報漏洩調査記録』
ひったくるようにファイルを奪うと、中に目を通す。
まあ、中にはぐうの音もでないような情報が盛りだくさんだ。
何のことはない。月との取引で『ニュータイプ専用ＭＳ』の情報を提供している事。

その見返りに、ジオンのＭＳ情報を取得し、それを量産ＭＳに転用している内容を記載しているだけだ。
「…こ、これは」
「機密情報保持違反のデータになります」
　自分で言っていれば世話はない。
「貴様は何を!?」
「これを連邦上層部に上伸してください。これにより…」
「私の話を聞け!!」
　両手で机をたたいてオレの言葉を止める。
「カルナギ中佐。これは、君がわざと情報を漏洩したという事か?」
「はい」
「なぜだ!!」
「理由はいくつかあります。主な目的として、連邦軍として、月企業のロビー活動に釘を刺すためです」
　アナハイムは月企業のトップに立つために、コーウェン少将ひいては連邦軍の支援を必要とする。
　しかし、それが達成されればアナハイムは月企業を統括する一大企業に成り上がる。

今はまだコーウェン少将をおもねる立場だろう。だが、連邦一将官と、月の最大企業の力の差は歴然だ。そうでなくても職業軍人であるコーウェン少将に月の経済圏をコントロールする力量はない。

だからこそ、オレは月企業への便宜を図った。情報を渡し、その開発を支援した。当然その計画が成功すればアナハイムは連邦軍軍需産業に大きく食い込むことになる。

それを見越して、アナハイムは月の経済圏を一気に掌握している。

そして、それは同時に、連邦への依存が絶対必要な時期でもあるのだ。

今なら、コーウェン少将の手で彼らの頭を抑えることができる。

そして、連邦を切り離せない以上、アナハイムはジオンを切り離すしかない。トカゲのシッポ切り。手を引くといった方法でジオンから離れなければ、自分の罪状を暴露されるだけだ。

もちろん、それは一時的なもの。連邦の監視の目が緩めば、時間を掛けて再構築する事も可能だろう。

一年戦争が終わらなければ。

『星一号作戦』を前にしたこの状況で、ジオンとのつながりを再構築する時間がない事をオレは知っている。ジオンが宇宙で連邦に勝利すれば、まだチャンスはあるが、それがない事をオレは知っている。

アナハイムが、開発するのは軍事兵器。それも戦争の中心となる主力兵器の生産だ。スペースノイドとアースノイドの確執による一年戦争に、バランサー気取りで戦争を食い物にするルナリアンという第三勢力を作るわけにはいかない。

「この一件で、連邦はアナハイムに対して、正統な理由を持って手を入れることができます。彼らが二枚舌を用いて、ジオンと連邦の両方に手を伸ばしているのは、この情報から見ても間違いありません。だからこそ、この証拠をもってアナハイムと月の経済圏を完全に連邦側に引き込みます。彼らに戦争の継続を目的とした妨害工作をさせることは絶対に許されません」

すでに連邦軍による新型ＭＳ開発計画は大詰めを迎えている。そこに投入した資金、資源、人材。まさしく社運をかけている以上、アナハイムは手を引けないし、手を引けない以上、顧客である連邦軍の要求を拒否できない。ましては、大義名分も法規制も連邦側にある。

独立採算制という名目も、本丸である本社あっての制度だ。本社がどちらを切り捨てるかは自明の理だろう。

「カルナギ中佐…」

「はっ」
しばし、思案するよう手を組んでコーウェン少将は目を閉じた。そして、一度大きく息を吸うと目を開け、ゆっくりと立ち上がる。
自分のデスクを回り込んで、オレの正面に立つ。
右手が持ち上がるのを見て、殴られるかと覚悟した。
が、その手はオレの肩に置かれる。
「中佐。私は君にとって理想的な上官ではなかったかもしれない。自分でも、君には迷惑をかけたと自覚している。だが、それでもだ。それでも私は君の上司だ。私は部下の尻ぬぐいくらいできる人間だと思っているのだがね」
オレの情報漏洩は、当然コーウェン少将にも責任問題として飛び火する。
だが、この資料をコーウェン少将が提出し、自ら断罪の大鉈を振るうことで、その問題を軽減させることができる。
いくら責任問題とはいえ、戦争の大詰めともなる宇宙決戦を前に、戦争の主力である主力ＭＳ開発責任者のコーウェン少将の首を挿げ替える余裕は連邦軍にはない。
そして、自ら責任を追及することで、自分への被害をコントロールすこともできる。
その為に、オレは独断専行で『ニュータイプ専用ＭＳ開発』やその他の量産ＭＳ計画を進めていたのだ。

だが、この上官はそれを分かった上で、それでもオレの為に自分の身を削ろうというわけだ。
正しく浪花節だよ。
「いいえ。閣下。これは自分がやらなければならない問題です」
だが、それはできない。
これが、地球連邦軍の勝利だとか、ＭＳ開発の職務としてなら、少将に甘える事もできただろう。だが、これはオレの「わがまま」だ。オレだけの私欲。オレだけの願い。オレだけが理解できる犠牲の上での覚悟だ。
その一片たりとも、誰かに与えるわけにはいかない。
「…そうか。わかった」
しばらくオレの目を見続けたコーウェン少将は、視線をはずし、壁にかかった軍帽をかぶり。制服の第一ボタンを閉めると。厳しい表情をしながら、再びオレの正面を立つ。
「君の望む通り、手心は加えん。君を助ける事もせん。部屋に戻って今後の対応を待ちたまえ」
そう言うと、表情を一転させる。胸を張り、誇らしげに頬を持ち上げる。
「コウイチ・カルナギ中佐。Ｖ作戦は成功した。大成功と言っても良い。それは君の功

績だ。君が行ったV作戦に対しての働きに、私は一片の不満も持っておらん。よくぞ、困難な職務を全うしてくれた。実に見事な働きだった」

そういって、部下であるオレに、まるで上官にするように踵を鳴らして敬礼した。

ああ、そうだったよ。あんたは理想的な上官ではなかったし、不満も愚痴もいろいろ言った。

けれど、そう悪くない上司だったかもしれないな。

「閣下。ご健勝を」

「君もな。中佐」

オレもまた、右手を上げて返礼する。

これで、何もかも終わったのだ。

４１　ジャブローからの刃

部屋に戻ると椅子に座って、帽子を机の上に放ると、背もたれに体重を預けて、ギシッと椅子をきしませながら天井を見上げた。

すべては、連邦軍が勝利する為。

キシリア・ザビによるギレン・ザビの暗殺。

その為のエサだ。

その為に、ソーラシステムの開発にテコ入れした。あの段階で、宇宙での反攻作戦『星一号作戦』の第一目標はまだ決まっていなかった。

宇宙要塞ソロモンか、月面都市グラナダのどちらかだ。

当然、ギレンを暗殺するキシリアを殺させるわけにはいかない。だから、キシリアのいるグラナダを避けるために、ソーラシステムを完成させる必要があった。

ソーラシステムは大規模破壊兵器だ。それを敵地とはいえ月面都市に使えばそこに住む民間人にも被害が出る。民主主義の軍隊である連邦軍に、その後の地球圏の治安を守る連邦軍が容易にその選択を選ぶ事はできない。だが、宇宙要塞ソロモンは軍事基地だ。民間人への被害は考慮しなくていい。

ルウム敗戦以降、連邦軍が初めて行う宇宙での大規模戦闘だ。絶対に勝たねばならない。連邦司令部は少しでも勝利する確率の高い方を選び、その確率を上げる為なら、使えるものなら何でも使うだろう。

結果、実用化したソーラシステムという秘密兵器を使うために、攻撃目標がソロモンに決まる。

そして、ソロモン戦によりザビ家次男のドズル・ザビが死ぬ。

死ななければならない。それによりジオン公王デギン・ザビが独断で和平交渉に向かう。それを阻止するために、ギレン・ザビがソーラレイで公王を殺す。

こうして、キシリア・ザビは『父親殺しの断罪』という大義名分を得る。

そして、この二人の仲を裂く。その後押しが『ニュータイプ専用ＭＳ開発』。

ガンダムＮＴ―１はなぜジオンに察知された？

簡単なことさ。オレが情報を渡したからだ。

最新ＭＳ技術の稼働データ。それも「ニュータイプ専用ＭＳ」というお題目。稼働データからどんな環境で実験したかを知れば、後はそこから逆算できる。オデッサ以降、地上での勢力圏が連邦に大きく傾いたとしても、あくまで傾いただけ。地上の半分を支配したジオンの影響力は０ではない。オレが不用意に渡したデータからその場所を特定するくらいできるだろう。

だからこそ。ＮＴ―１なのだ。だからこそ「ニュータイプ専用ＭＳ」なのだ。
何せ、オレは「ガンダムアレックスがなくても一年戦争に勝てることを知っている」。ニュータイプ理論。ジオンにとって超一級の秘密事項であるこの情報は、絶対に無視できないキーワードだ。
月面都市フォンブラウンのアナハイムによって、連邦軍が提供した情報がジオンに流れる事は決まっていた。その為の後押し（納期繰上げ）をしたくらいだ。
そして、この情報が流れる先が、同じ月面都市グラナダになる可能性が高い。そして、グラナダにあるのが、キシリアが統括する『突撃機動軍』。
そして、キシリア・ザビが主導するニュータイプ研究機関『フラナガン』。
オレの持つ『ニュータイプ専用ＭＳ』の情報は間違いなくそこへ行く。
そして、ここでオレが捕縛される。連邦上層部だってバカじゃない。アナハイムがジオンに情報を流していたとしても、そこを徹底究明して今まで投資した情報と資金を無駄にするようなことはしない。
疑惑の目を向け、釘を刺し、監視の目を強める。
アナハイムだって、そんな状況でジオンに情報を流したりはしない。当然、この宇宙圏に於いて中立勢力を経由したジオンの諜報パイプが遮断される。
キシリアの元に入った情報は連邦の「ニュータイプ専用ＭＳ開発」という情報。しか

し、その詳細は手に入らなくなる。
ジオンのニュータイプがすべて『ニュータイプ専用機』に乗っているという事実から、彼らは連邦の『ニュータイプ専用ＭＳ』を無視できない。
ましてや、連邦のニュータイプ『アムロ・レイ』が活躍すればするほど、連邦ニュータイプ専用ＭＳの重要度が増す。
是が非でもその情報を手に入れるために強硬手段に訴える。
土壇場で情報が手に入らなくなったキシリアにとっては。たかが、新型ＭＳ一機に対して核兵器を使うというのは、決して大げさな選択ではないのだ。
一年戦争開戦前に、もし連邦ＭＳを開発している情報を察知したら。ジオンは間違いなく核を使ってでもそれを破壊していただろう。
そして、確信している。
連邦の『ニュータイプ用ＭＳ開発』において、ギレン・ザビは何のアクションもおこしはしない。
ギレン・ザビの目的が連邦宇宙艦隊の壊滅だとするなら、連邦のニュータイプ研究はなんの障害にもなりはしない。
しかし、その事実を知らないキシリアは、〝ニュータイプに最も理解ある司令官〟はそれを無視できない。

「総帥がニュータイプの存在を認めてくれればよかったのだよ」
そう愚痴るように、二人の間に溝ができる。
その上で、〝連邦のニュータイプ〟アムロ・レイがジオンのニュータイプを撃破していく。
アムロ・レイを追う赤い彗星はキシリア麾下の直轄部隊。その部下は当然キシリア配下だ。ギレン・ザビが手を打たない事で、キシリア・ザビの手駒に被害が出る。
「少しでもニュータイプの素質のあるものをぶつけるしかない」
そうとも。キシリアは最後までそこに固執するし、その事実をギレンは最後まで認めない。
ニュータイプとモビルスーツ。両者の認識に、決して埋まらない齟齬が生まれる。ギレンが「こだわり過ぎる」と揶揄するほどに、二人の認識はすれ違い、そこに父親殺しの大義名分が突き刺さる。
キシリア・ザビ。
オレの目的は、お前がギレンを殺すことではない。
お前が、ギレンに代わってア・バオア・クーで指揮する事だ。
「Ｓフィールドにモビルスーツ隊を集中させい」

ギレンを殺した後にお前が言ったセリフ。

あの時、頭に浮かんだこの言葉。なんでもないこのセリフこそ、すべての根幹。

ギレンの宇宙艦隊壊滅の構想を、キシリアは知らない。でなければ、キシリアはギレンの作戦を堅持し続けたはずだ。彼女は政治家であるが無能な指揮官ではない。

ギレンがキシリアにそれを告げなかった理由。それはＭＳ開発をキシリア派閥が主導で行っている点だ。

『ペズン計画』『統合整備計画』を行ったのがマ・クベ大佐。彼はキシリアの腹心だ。ＭＳ統括としてのキシリアの影響力は大きい。

だからこそギレンは「モビルスーツの存在を囮とした連邦宇宙艦隊壊滅構想」を話すことはできない。連邦を圧倒するジオンの守護神モビルスーツに、強い影響力を持つ彼女の政治的立場を根底から揺るがすからだ。

勝利した後を考えれば、唯一残った政敵キシリアの基盤中枢を揺るがすこの作戦を、ギレンは話すことはできない。

彼女は優秀な政治家だ。だが、卓越した指揮官ではない。

連邦司令部が考えるように、ジオン上層部が考えるように、モビルスーツによる決着させようとする。

〝独裁者〟であるギレン・ザビの真意を知る必要ない存在でしかない。
それこそが、オレの危惧するギレンの構想の致命的欠点。
すべてはその為。
兄妹の認識の差。兄妹でありながら政敵である構図。両者の持つ支配基盤。ギレン・ザビの暗殺は結果であって過程ではない。
その過程へと導くために、すべてを捨てた。
身を削ってでもソロモン攻略を強行させ、
大義名分を与えるために、味方に渡すべき情報まで秘匿した。
二人の仲を裂く為に、情報漏洩までした。

「ははは。割が合わないにもほどがある」
自虐するように口に出す。そんな事の為に味方を殺し、上司の信頼をなくし、地位も失う。
だが…

ふと入口が騒がしくなったかと思うと扉が開いた。そこには３人の憲兵と、その後ろに困った顔のマリドリット伍長がいる。

「コウイチ・カルナギ中佐。貴官には機密漏えいの容疑がかかっています。ご同行していただきたい」
「了解した」
椅子から立ち上がり、机の上の帽子に目をやった。
軽く肩をすくめると、帽子をそのままに、出口に向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

軍法会議は速やかに行われた。ジャミトフ大佐は顔も出さなかったし、告発者のコーウェン少将も淡々と事実を述べていく。
判決は極めて速やかに出された。
「コウイチ・カルナギ中佐。懲役三年」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

宇宙世紀００７９．１２
『星一号作戦』開始。
宇宙要塞ソロモン陥落。
ザビ家次男ドズル・ザビ中将死亡。

同月
ジオン公国ソーラレイによりレビル将軍死亡
同月
ア・バオア・クー陥落。
ジオン公国総帥ギレン・ザビ死亡
ザビ家長女キシリア・ザビ死亡
宇宙世紀００８０．０１
ジオン共和国と終戦条約を締結
宇宙世紀００８０．０８
終戦特赦により、コウイチ・カルナギ中佐釈放

こうして、一人の転生者による一年戦争は終わった
しかし、戦争が終ろうとも宇宙世紀は続く。

彼はまだ、己をも巻込む『刻の涙』を知らない…

ジャブローのモグラども　～　一年戦争編　完　～